

災害メモリアルアクションKOBE

# ACTION 2023

伝える大震災、つながる防災

# 目 次

開会のあいさつ	1
活動発表	
兵庫県立舞子高等学校	2
滋賀県立彦根東高等学校	5
TEAM-3A	8
国立明石工業高等専門学校 D-PR0135°（明石高専防災団）開発チーム	10
国立明石工業高等専門学校 D-PR0135°（明石高専防災団）地域連携チーム	13
神戸学院大学 現代社会学部 社会防災学科 安富ゼミ	15
神戸学院大学 クローズアップ社会研究会	18
関西大学 社会安全学部 奥村研究室	21
兵庫県立大学 防災リーダー教育プログラムチーム	24
パネルディスカッション	27
グラフィックファシリテーション記録	43
閉会のあいさつ	45
災害メモリアルアクション KOBE2023 のことば	46
プログラム	47
委員・学生名簿	49
発表風景等	51



## 災害メモリアルアクションKOBÉ 兵庫県立舞子高等学校

### ★目標

私たちが被災者と未災者をつなぐかけ橋になろう

### ★活動内容

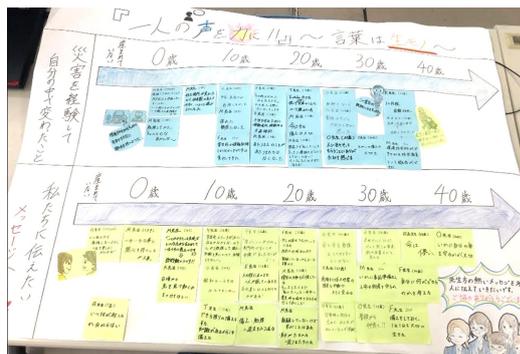
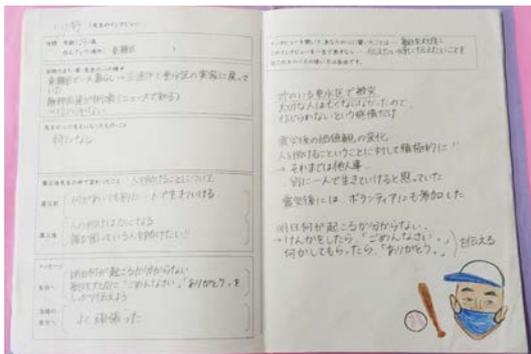
〈インプット〉

- ・学校の先生方へインタビュー

〈アウトプット〉

- ・インタビュー結果をもとに年表と冊子を作成
- ・1.17震災メモリアル行事でのワークショップ

### ★わたしたちが「創ったもの」



### ★課題

〈冊子について〉

- ・白黒で、色合いがさびしい
- ・表現がかた苦しい
- ・吹き出しなどの図形を使った方がいい

〈防災読本について〉

- ・全然進んでいない  
→目次だけでも作りたい
- ・コンテンツが集めきれしていない  
→他のメモアクトチームからも助言がほしい

### ★伝えたいこと

私たちは、先生方に阪神・淡路大震災発生直後のことについてのインタビューをする活動を今まで続けてきました。「学校の先生」という身近な存在の方々からお話を聞くことで、阪神・淡路大震災の経験を自分事として捉えようという気持ちがより深まりました。インタビューをした生徒の中には、先生方のお話を未災者である私たちが自分事のように語り継いでいいのかという不安を抱える子もいます。しかし、阪神・淡路大震災の教訓を未来に残し、多くの方の命を救うために、私たちは語り継いでいきます。

○**舞子高等学校 1** 皆さん、こんにちは。兵庫県立舞子高校です。今から舞子高校チームの発表を始めます。よろしくお願いします。

○**舞子高等学校 2** 初めに、舞子高校チームの目標、次に今年度の活動報告、最後に来年度に向けた課題についてお話しします。

○**舞子高等学校 1** 今年度は、次のことを目標に活動してきました。

今年度の目標は昨年度と同じく、「私たちが未災者と被災者をつなぐかけ橋になろう」です。

昨年度の目標が果たせず終わってしまったため、今年度も引き続き、被災者と未災者をつなぐかけ橋になるための力を私たち自身が身につけていきたいという思いで、継続して行うことになりました。

○**舞子高等学校 2** 私たち舞子高校チームは、この目標のもと活動してきました。

それでは、1年間の活動を報告します。私たちが1年間で行ったことは、主に3つあります。

○**舞子高等学校 1** 1つ目は、新たにインタビュー用紙をつくりました。

左の写真は、昨年度のインタビュー内容をまとめたものです。A4見開き1ページに4人の先生のインタビュー内容が求められています。右の写真は、今年度のインタビューをまとめたものです。1人の先生につきA4見開き1ページを使うことにしました。

○**舞子高等学校 2** これが今年度つくったインタビュー用紙です。

用紙の左面には、当時の年齢、住んでいた場所、当時のまち、家、先生の心の様子、先生の心の支えになったもの・こと、震災後、先生の中で変わったこと、生徒に向けたメッセージなどの質問事項があらかじめ印刷されています。

用紙の右面はフリースペースで、インタビューをした生徒が先生の話を聞いて心に響いたことなどを書けるようにしています。また、このインタビュー用紙は、インタビューする際のメモ用紙であると同時に、そのまま冊子の1ページにもなる清書用紙としても使っています。

○**舞子高等学校 1** 実際にこの用紙を使った感想をメンバーの2人に聞きました。1人目は、あらかじめインタビュー用紙に質問内容が書かれており、枠組みも決まっていたから分かりやすく、まとめやすかったと言っていました。

○**舞子高等学校 2** 2人目は、あらかじめ質問が決められていたため、質問内容がそれだけになってしまい、先生の言いたいことが本当にインタビューできているのかが気になったと言っていました。

○**舞子高等学校 1** 中間報告会のワークショップでは、インタビュー用紙についてのご意見を募りました。冊子のページが白黒で殺風景なので色を足す、印刷されているフォントを変え、誰もが読みたくなる冊子にしたほうが良いなどのご意見をいただきました。





中間報告会のワークショップでいただいた意見を取り入れ、今回使ったインタビュー用紙の上から新たに色を足し、印象を明るくして読みたくなるような冊子にしました。また、今後はさらに色のつけ方を工夫し、見やすくなるようにします。フォントの変更については、来年度検討します。

○舞子高等学校2 活動の2つ目は、インタビューを年表にまとめることです。

毎年、先生へのインタビューを年表形式で模造紙にまとめています。4つの項目に分けており、1つ目は被災当時何をしていたか、2つ目は心の支えになったもの、3つ目は災害を経験して自分の中で変わったこと、4つ目は私たちに伝えたいメッセージです。

これが実際年表にまとめたものになります。自分の地域でも地震が起きることを知ったという意見が印象的でした。現在は地震が起きることが当たり前で、どこの場所でも地震が起こると言われている中、阪神・淡路大震災が起こる前は、地震が自分の地域で起こらないという考えがあったことが印象的でした。

○舞子高等学校1 活動の3つ目は、防災読本の大きな内容を決定したことです。

防災読本とは、舞子高校の避難所運営のマニュアルを生徒に分かりやすいようにまとめたものです。避難所運営のマニュアルの内容を先生だけが把握しておくのではなく、生徒も知っておくことで、先生の手助けができるのではないかと考えています。

防災読本には、備蓄倉庫にある物をリスト化したもの、コロナ禍で避難所生活をするときの衛生管理の仕方、聴覚障害や視覚障害がある方の対応方法などを載せています。そして、防災読本を参考にして、誰もが災害時に活用できることを目的としています。

舞子高校では、普通科5クラス、環境防災科1クラスで構成されており、それぞれの学科に合わせた冊子



をつくらうと考えています。普通科の生徒用に、コロナ禍の避難所生活で気をつけることや備蓄品を置いてある場所などをまとめ、環境防災科の生徒用に、先生の避難所運営の内容を知るための冊子をつくらうと考えています。

○舞子高等学校2 まとめとして、来年度に向けた抱負をお話しします。

来年度は、防災読本の作成を進めようと考えています。具体的に何を書かかを決定し、作成していきます。

そして、インタビュー用紙の改善も行おうと考えています。先ほど言ったように、インタビュー用紙に全体的に色を足し、見やすくするなどの改善をしていきます。

これで舞子高校チームの発表を終わります。ご清聴ありがとうございました。



○彦根東高等学校 1 彦根東高校です。「福島をつなぐ」チーフを担当させていただいております、2年の橋本萌です。

○彦根東高等学校 2 編集長の宇田優奈です。本日はよろしくお願ひします。

私たち新聞部は、1年生6人、2年生9人の計15人で活動をしています。

活動内容は、月に1回、本紙の発行、そして速報新聞「キマグレ」の発行、そして本校のマスコットキャラクターである「ぎんにゃん」のお世話を主に行っております。

モットーは「やりたいことは何でもやる」で、学校行事や部活動結果などを取り上げるだけでなく、様々な社会問題に高校生の目線から取り上げたりもしています。

本日は、その特集の中でも特に力を入れている「福島をつなぐ」について紹介したいと思います。

○彦根東高等学校 1 2011年3月11日、東日本大震災が起こった1か月後、福島県立相馬高校出版局から「相馬高校新聞」第139号が届きました。当時の新聞部員が衝撃を受け、伝えたい、つながりたいという思いから「福島をつなぐ」は始まりました。

今年度の特集は、記憶の風化が始まる今と、東日本大震災では原発事故のために風評被害もあったということについて触れました。昨年の5月に発行した「福島をつなぐ特集号」では、当時の風評被害とこれからについて、また記憶の風化について触れました。

安積黎明高校さんは、当時はまだ義務教育前で、実

際に被災した人の記憶は同世代の中でも薄れ始めていたり、当時の記憶がそもそもほとんどない人もいました。

福島県庁の高橋さんは、福島の物への安心を伝えるために、共感の輪を広げることが大切だとおっしゃっていました。

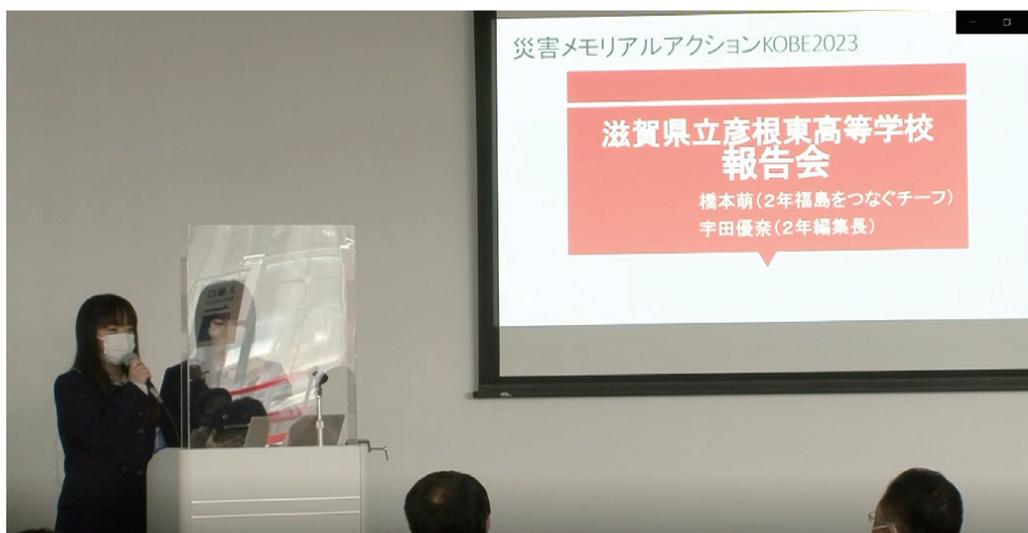
福島中央テレビの緒方さんは、メディアが風評をおおらないように魅力を伝えることが大切だとおっしゃっていました。

5月に発行した「福島をつなぐ特集号」を通して、夏に向けての私たちの問題意識としては、1の災害を人ごとにしていないかを基盤として、2、3の生活を支える食の安全、水の安全について知りたいということと、震災から立ち直りつつある福島の葛藤と魅力を伝えたいということについて意識を持ちました。

昨年8月に福島を現地で取材をさせていただきました。3日は福島市内で取材をさせていただき、4日はこちらの宇田がいる中通り班と、私、橋本がいる浜通り班に分かれて取材をさせていただきました。

昨年10月に発行した「福島をつなぐ特集面」では、福島の葛藤と魅力について取り上げました。しかし、新聞は伝えることと記録することが役割としてあります。不安を持ったままでは魅力は伝わりません。安心につながるためにもALPS処理水についても取り上げました。

経済産業省エネルギー庁の木野さんは、震災以降、安全性を伝えるため、福島に赴任してからずっとどまっていたらっしゃいます。処理水放出について地元の方々に納得してもらえるまで説明を続けたい、また多くの人は復興についてのイメージが震災当時のままで





そのためには、私たち高校生が福島の持つ多様な面をこれからも伝え続けていくことが必要だと思いました。また、福島を通して浮き彫りになった水・食・風評などの身近な話題にフォーカスすることも大切だと感じました。

ご清聴ありがとうございました。

あるため、自分から関心を持って正しい情報を得ようとするのが大切だとおっしゃっていました。

大堀相馬焼陶吉郎窯の近藤さんは、現在も一部が帰還困難区域の大堀で被災し、今はいわき市で大堀相馬焼をつくっていらっしゃいます。伝統の火を絶やさないためにつくり続けていらっしゃるそうです。

福島中央テレビの渡邊さんは、原発からわずか数キロメートルの大熊町に住んでいらっしゃいました。復興の形を模索して、新しいまちができてほしいとおっしゃっていました。

道の駅よつくら港は、いわき市にある漁港と隣接した道の駅で、漁師さんともつながりが深いです。駅長の白土さんは、正しく恐れ、知見を得ることが大切と述べられ、福島は元気に前向きに動いていると知ってほしいと語られていました。

福島県庁の穴澤さんは、福島県オリジナルブランド米「福、笑い」について聞かせてもらいました。開発者とよりすぐりの生産者、どちらもがおいしさにプライドを持ってつくっていらっしゃるそうです。

松崎酒造の松崎さんは、土地の風土を届けるのが日本酒、お酒から福島に興味を持ってもらいたいとおっしゃっていました。

桃農家の草野さんは、一流の桃をつくっていて、それを五感で味わってほしいと話していました。

新聞部員の声としては、難しい内容も分かりやすく伝えたい、実際に訪れなければ分からない福島の魅力を知ることができ、多角的に見ることが大切だという声が上がりました。

「福島をつなぐ特集面」のまとめとして、記憶の風化や関心の薄れ、また、震災による被害や問題を自分たちに関わる問題だと捉えられているかについて触れました。震災による被害や問題を自分ごとだと捉えてもらうために、これからも伝え続けていきたいです。

最後に、記憶の風化を止めるために、人ごとではなく自分ごとにしてもらうことが大切だと思いました。

# TEAM-3A



## TEAM-3A

Produced by 特定非営利活動法人TEAM・あげあげ

**【CONCEPT】 いつでも・どこでも・だれでも楽しく「ぼうさい」**  
 チーム名の三つのAは A(akashi)A(association)A(age) 明石のyouthが地域防災に取り組むチームを表します。

**1. チーム紹介**  
 2022年5月  
 明石市内の高校生が幅広く地域防災の活動に取り組むために自主的に集合!!  
 NPO法人TEAM・あげあげのサポートで学生による地域防災チームを結成!!  
 チームの前身めいなん防災ジュニアリーダーMRDPで培った「地域で繋がる防災」の実践を開始しました。  
 現在は24名(高校生11名、卒業した学生11名、社会人2名)がメンバーとして活動中!!



**3. 2022年度の主な活動(12月まで)**  
 5月 市内の厚生館に集合してチーム結成式を実施。  
 6月 明石市青年会事務所が8月に主催する防災運動会のリハーサル会に共催団体として参加。  
 7月 本格的な活動開始!!加古川市、明石市でオリジナルゲーム「MRDP版にげろ!あにまるず」の体験会を実施。  
 明石市防災会議専門委員としてジェンダー視点の防災についての議論に参加した。  
 8月 明石市青年会事務所主催の「Bスポーツ」に共催団体として参加。明石市内の明石清水、明石産業の他加古川南、高砂の4校とのコラボでオリジナルの体験型イベントを実施。  
 明石市社協の協力で学生対象の「まちづくりワークショップ」を実施。ファシリテーターを務めた。  
 加古川市の保育園で3〜5歳児対象の「ぼうさいきょうしつ」を実施。  
 10月 「ぼうさいこくたい」のワークショップ部門で「MRDP版にげろ!あにまるず」体験会を実施。  
 11月 明石市総合防災訓練に独自のブースを設定して地域住民対象にオリジナルの防災ゲームを実施。  
 12月 ひょうごボランティアプラザで開かれるwithユースプロジェクト交流会に「ぼうさいこくたい」出展チームとして参加。  
 ☆令和4年度「ぼうさい甲子園」で「だいじょうぶ賞」受賞!!  
 ※チーム結成からわずか半年で多くのイベントに参加または独自に実施することができました。またイベント実績の数も1月以降にもすでに6件の予定が決まっています。TEAM-3Aの最初の「A」は今が「AKASHI」ですが、行く行くは「AI HYOGO」にできるようにこれからもますます進んでいきます!!

**2. オリジナリティ**  
 I 「できることをできる人がする」自主性重視のチーム  
 II 視点を地域コミュニティに置いた取組み  
 III 手作り感覚の活動

◎TEAM-3A Original BOSAI item

●2018年チームで考案した高齢者から子どもまで楽しく防災に取り組める体験型ゲーム「にげろ!あにまるず」を地域の防災訓練で実施しました。  
 これは怒りや不安の家族が地震発生から避難グッズを持って避難所に急ぐという趣旨のゲームです。  
 ●2019年明石高専D-PRO135\*との交流を通じて「にげろ!あにまるず」のゲームボード版が完成しました。さらに、2020年の4月に続編の「かいけつ!あにまるず」が避難所に着いたあにまる一家が避難所で起こるトラブルを解決しながらゴールに向かうというものです。  
 この二つのゲームは今年度商標登録申請を行い、10月27日手続を終了しました。☺  
 商標番号6633281 商標名「MRDP版にげろ!あにまるず」



◎2022年のTEAM-3A





○ **TEAM-3A 1** それでは、今から TEAM-3A の発表をさせていただきます。よろしくお願いいたします。TEAM-3A 代表の浜田です。

○ **TEAM-3A 2** 副代表の和田です。よろしくお願いいたします。

2022年は、復興ボランティアで宮城県南三陸町に訪問し、東日本大震災で被害を受けた大川小学校や気仙沼向洋高校旧校舎に行きました。また、明石市防災会議「ジェンダーと防災に係る専門委員会議」に参加させていただきました。

去年は、「あにまるず」体験会を9回実施しました。ゲームの進行役として、最初はとても緊張しましたが、参加して下さった子供から大人の方まで楽しんでる姿を見てやりがいを感じ、緊張がほぐれました。2月まで「あにまるず」体験会の依頼が入っています。

明石市からの「あにまるず」の依頼を受けて、総合防災訓練でブースを設置いただき、実施しました。卒業生も5人参加していただきました。

この「あにまるず」でぼうさい甲子園で賞を受賞し

ました。明石市からも活動への感謝状をいただきました。そして、神戸新聞に掲載されました。

○ **TEAM-3A 1** さらに今年は、2019年以降の秋以降、コロナウイルス感染拡大で実施できなくなっている、「にげろ！あにまるず」という僕らがいつもやっているゲームの元にもなった「体験版にげろ！あにまるず」が3月4日、朝霧小学校区防災訓練で復活します。

では、ここで「体験版にげろ！あにまるず」の動画を流します。

○ **TEAM-3A 1** 今年はさらに活動の幅を広げ、よりたくさんの人に楽しく防災を学んでいただけるように頑張りますので、これからも応援よろしくお願いいたします。

そして、1月13日にNHKさんの「Live Love ひょうご」という番組にも出演させていただきます。よかったらぜひご覧ください。

ご清聴ありがとうございました。





○明石工業高等専門学校 それでは、D-PRO135° ゲーム開発班の報告をさせていただきます。D-PRO135° の大坪です。よろしくお願いします。

ゲーム開発班では、新ゲーム「TRY！」の開発と体験会を行いました。

最初に、これまでに開発したゲームを紹介します。

1つ目は、D-PRO135° の防災講義で最もよく使用している「RESQ」です。「RESQ」は、災害が起こったときに発生する様々なトラブルを防災グッズをうまく使って解決していくボードゲームです。このゲームは、トラブル解決を通して互いに助け合う共助の考え方を身につけてもらうことを狙いとしています。

D-PRO135° のホームページでは、「RESQ」のゲームデータを全て公開しており、「RESQ」よりもゲームの難易度を下げた「RESQ ライト版」や、ボードのマップを自分の住む地域に合わせて遊べる「RESQ +」もご依頼に応じて提供しています。

次に、風水害をテーマとしたボードゲーム「choice」です。「choice」は、ゲームを実施する地域のハザードマップをもとに作成したボードを使い、ミッションクリアのために行動しながらも、災害の前兆が起こってから災害が発生するまでどのように行動すべきなのか、それも同時に考えて遊んでもらうゲームとなっています。ミッションを通じて命を守る選択について考えてほしいという思いから、ゲーム名は「choice」としました。

最後に、プレイヤーが避難所運営者となって避難所で起こる様々なハプニングをグループで乗り越えながら行うディスカッション型のゲーム「チャレンジ！」です。「チャレンジ！」は、避難所内の避難場所の割り

当てや規則を考え、それを実際のハプニングが発生したときに対処できるかということで競うゲームになっています。対面での実施が困難となった際でも遊べるように、ZOOMを用いてオンライン上で行う「チャレンジ！オンライン」も作成しました。

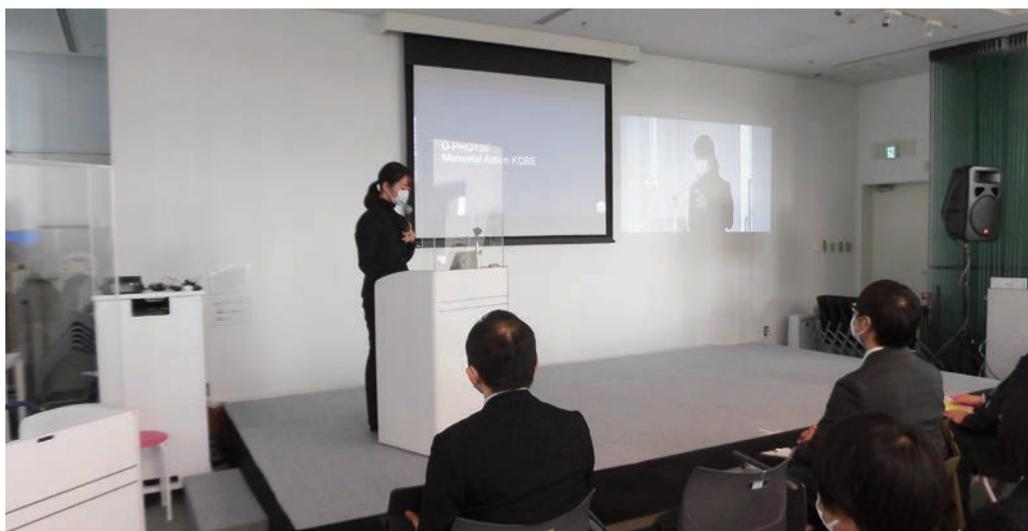
続いて、「TRY！」の開発について報告します。キックオフ会や中間発表会でも紹介したように、「TRY！」は防災知識を身につけることを狙いとしたゲームで、避難所内のトラブルを解決するゲームとマークかるたの2種類のゲームを開発しています。

まず、避難所トラブル解決ゲームについて報告します。このゲームは簡単にまとめると、何人かでチームをつくり、アイテムカードを使ってトラブルに対応をしていくゲームです。

1つ実際のお題を用意しました。この4枚のアイテムカードの中から2枚を使って、右の「避難所でごみを捨てるところがない、どうしよう」というハプニングを解決します。私は、ティッシュの中身をタオルにくるんで空いた箱をごみ箱にするというアイデアを思いつきました。これに対してチームのメンバーの過半数が納得すれば、このハプニングカードをゲットできます。そして、最後に最も多くのカードを持っていた人が勝ちとなります。

もうお分かりかと思いますが、「TRY！」の避難所トラブル解決ゲームは、避難所で発生したトラブルに与えられたアイテムで対応するゲームで、チームで行うゲームになるため、アイスブレイクとしてできるのではないかと期待しています。

次に、マークかるたについてです。ルールは一般的なかるたと同じです。読み札に書かれた内容に対応し





た取り札を一番多く取れた人が勝ちです。災害に対するアイデア出しの前準備になることも期待でき、マークとその意味を覚えることに特化させた神経衰弱としても遊ぶことができます。

「TRY！」避難所トラブル解決ゲームの開発では、D-PROの定例会、小学生への防災講義、そしてメモリアルアクション中間発表会の3か所でテストプレイを行い、その都度、改善案の話し合いを行いました。

小学生を対象とした防災講義では、ゲーム1周に30分程度の時間を要すること、プレイヤー人数は4人から5人がベストであること、そして賛成意見が多く、点数が取りやすかったことが分かりました。

その一方の課題として、小学生にはルールが分かりにくい、漢字や意味が分からないときがある、カードの枚数を3枚に決めると考えづらくなる、ほかの人が発表している間にまた別の人がお題の提案をし始める、句読点が少なく複数の意味に捉えられるといった課題が上がりました。

そして、メモリアルアクション中間発表会では45個の貴重なご意見をいただき、改善案としては、アイテムが固定化されるとつらい、メンバーを入れ替え制にしてもよいのではないか、ポイント制にしてはどうか、ほかの人にお題を考える権利が欲しい、裏の色を変えてほしい、あと1枚リクエスト追加できるようにしてほしい、判定を○×△のプラカードで表すのがよいのではないかというご意見をいただきました。

そして、防災講義と中間発表会での改善案を踏まえて再度部員で議論した結果、問題チェンジ、アイテム交換の権利、エンタメ要素の追加、1枚で解決、4枚で解決といった問題も新たに作成する、回答に制限時間を設ける、体育館編・公民館編などシチュエーションを増やす、判定に匿名性を持たせる、回答事例集をつくるなどの解決案が決定しました。

決定した解決案をもとに、次年度「TRY！」制作第2弾として、ルールの改編とカードの見直しを行いま

す。また、「TRY！」開発第2弾と「TRY！」のマークかるた編の作成を進めていく予定です。

以上、D-PRO135° ゲーム開発班の報告でした。ご清聴ありがとうございました。

# 国立明石工業高等専門学校

## D-PRO135° (明石高専防災団) 地域連携チーム



# D-PRO135°

## 明石高専防災団 地域連携班

### 防災イベントへの参加

今年度も高齢者施設や社会教育施設などで開催された多くの防災イベントへ参加し、「楽しい防災」をテーマに防災ゲームや講義を通して幅広い世代に防災を広める活動を行いました。また、今年度の防災イベントでは、普段おもに行っているD-PRO135°のオリジナルゲーム「RESQ」の体験会にとどまらず、新たに制作した「TRY!」の体験会や防災スポーツイベントへのブース展示なども実施し活動の幅を広げることができました。新型コロナウイルスの影響で減少していたイベントですが、感染防止に配慮しつつ活動の回数を増やすことができました。



### 明石市防災DXシステムの開発協力

明石市役所の方々と実際に話し合い、市役所内や明石市内で使用する防災DXシステムを開発しました。これにより明石市役所内での防災グッズの貸出し状況をペーパーレス化したり、災害時に明石市内の避難所の場所やその状態を簡単に把握することができます。マニュアル等も自分たちで作成し、実用化に向けて積極的に活動することができました。



### 地域の学校での防災授業

今年度も兵庫県内の複数の中学校や高専で防災授業を行いました。オリジナルゲーム「チャレンジ!」を用いた避難所運営についての講義だけでなく、学年ごとにそれぞれクロスロードゲームや自作の防災クイズなども授業に組み込み、D-PRO135°が継続的に防災授業を行っている中学校に対し、毎年別の内容の講義ができるように対応しました。

今後も若い世代に防災について知ってもらうという活動を続けていき、授業を行う地域の特色に沿った講義を行うなどの工夫で更にその質を高めていきたいと考えています。



### 株式会社ノーリツへのインタビューとぼうさいこくたい2022への参加

株式会社ノーリツへのオンラインインタビューを行い、給湯器のシステムや災害時のインフラ対策についてまとめたパネルを作成しました。

また、兵庫県立大学と共同でブース展示を行い、D-PRO135°の活動や防災DXの取り組みについて紹介しました。

防災そのものだけでなく、D-PRO135°についても知っていただく貴重な機会を得ることができました。



### 今後の活動

現在、複数の団体からイベント協力依頼が届いています。今後も、「実は防災って楽しい!」のキャッチフレーズを伝えていくために、自分達にできる取り組みをすすめていきたいと考えています。



○明石工業高等専門学校 それでは、D-PRO135° 地域連携班の報告をさせていただきます。大坪が発表します。よろしくお願いします。

発表内容は2022年度の活動の成果と今後の活動についてです。

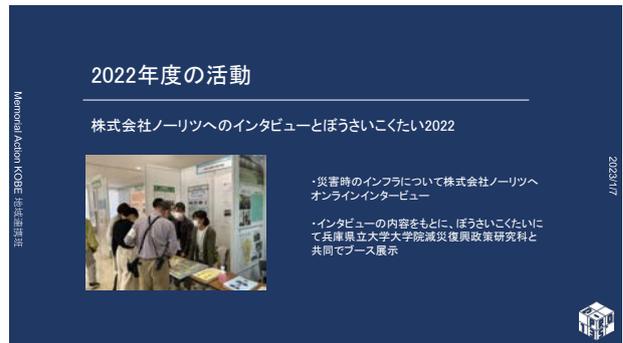
2022年度は、地域の学校での防災授業、防災イベントへの参加、明石市防災 DX システムの開発への協力、株式会社ノーリツへのインタビューと「ぼうさいこくたい」への参加を行いました。そして、ぼうさい甲子園ではウィズコロナ賞をいただきました。

まず、地域の学校での防災授業では、明石市、神戸市、稲美町にある中学校と高专で避難所運営ゲーム「チャレンジ！」やクロスロードゲームを用いた、授業をする学年に合わせた講義を行いました。

そして、キックオフ会から現在までで明石青年会議所の方とのBスポーツイベント、RESQ ロボットコンテストでの防災すごろくワークショップ、株式会社ノーリツへのオンラインインタビュー、明石市役所の方との防災 DX システムの開発、地域のコミュニティセンターや高齢施設での防災授業とゲーム体験会、そして「ぼうさいこくたい」でのブース展示を行いました。

防災 DX システムの開発では、D-PRO のチームは、避難者情報の登録を簡単にするため、避難所で紙に記入している避難者の情報を紙からスマホの入力に変えるシステムの開発と、市役所の防災部局が管理する防災資機材の関係部局への貸出しを紙管理からオンラインへ切り替える市役所内の防災資機材貸出しのDX化を行いました。

「ぼうさいこくたい」では、兵庫県立大学大学院減災復興政策研究科と共同でブース展示を行い、災害時のインフラについて株式会社ノーリツのオンラインインタビューを行った結果をもとに、オンラインセッションにも参加しました。活動の写真はこのような感じでした。



今後の活動予定ですが、ありがたいことにお問い合わせフォームにぞくぞくと依頼が入ってきているため、引き続き各種防災イベントへの参加や、防災出前授業を行う予定です。

今後の活動目標ですが、地域の学校への防災授業を継続的に行い、授業を行う地域の特性に対応した授業を提供していくこと、新しい防災イベントへの積極的な参加、SNS を使ってさらに活動を広げ、D-PRO のキャッチフレーズである「実は防災って楽しい！」を伝えていくことです。

以上、D-PRO135° 地域連携班の報告でした。ご清聴ありがとうございました。



# 神戸学院大学

現代社会学部 社会防災学科 安富ゼミ

岩泉町「2016年台風10号」  
大槌町「東日本大震災」  
～被害調査・現地視察～

神戸学院大学 防災聞き書き隊part3  
安富ゼミ  
発表者 藤奇 関 八木

## 災害メモリアルアクションKOBЕ 2022 岩泉町「2016年台風10号」 大槌町「東日本大震災」 ～ 被害調査・現地視察 ～



神戸学院大学 / 現代社会学部 / 社会防災学科 / 安富ゼミ

### 岩泉町

令和4年8月5日、2016年に起きた台風10号による被害を受けた岩手県岩泉町にて被害調査を行いました。岩泉町役場で当時の被害状況や現在行われている防災対策についてのお話を聞かせていただいた後、9人の犠牲者が出てしまった「高齢者グループ施設 楽ん楽ん」跡地や当時氾濫した小本川へ現地視察を行いました。

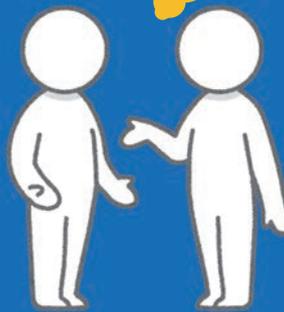


### 大槌町

8月6日に大槌町へ訪れ、午前中は2011年に起きた東日本大震災での大槌町の被害について、おらが大槌夢広場の神谷未生さんから話をお聞きました。午後は3人の語り部さんから東日本大震災当時のお話をお聞きました。



少しでも命が助かりやすい声掛けの仕方はなにか、良い情報の発信の仕方はなにかを考える必要があることを学びました。



-----Member-----

教授 安富 信  
3年 藤奇隆太 角矢久龍 東汰一  
佐桑健介 八木颯太 関航 二星雄大  
木川綾介 兵山穂香 光瀬晴夏

ポートアイランドキャンパス 〒650-8586 兵庫県神戸市中央区港島1-1-3 ☎078-974-1551

○神戸学院大学1 皆さん、こんにちは。今から神戸学院大学防災聞き書き隊安富ゼミの発表を行います。発表者の関です。

○神戸学院大学2 発表者の八木です。

○神戸学院大学3 藤崎です。

○神戸学院大学1 よろしくお願ひします。

まず初めに、防災聞き書き隊について紹介します。私たちは、元マスメディア関係者である安富教授のもとで災害情報について学んでいます。実際に被害に遭った現地へ足を運び、現地の人々にインタビュー調査やアンケート調査を行っています。そして、災害エスノグラフィーから被害前後を分析し、意識調査の第一歩を目的とした活動を行っています。

そもそも災害エスノグラフィーとは何なのかを説明していきます。災害エスノグラフィーとは、災害の体験をした人へ当時の様子についてどのようなことにしたのかインタビューを行い、教訓や知識を学ぶことです。そのため、ただ単に事前に考えたことを質問するのではなく、インタビューの中から深く掘り下げていくことが大切になっています。災害情報とは、自分自身で調べることも重要ですが、より細かく聞くためには、人から聞き、そこから対策することが重要になっています。

そして私たちは、8月4日から8月7日までの期間に岩手県大槌町と岩泉町を訪れました。最終発表に向けて行ったことは、大槌町、岩泉町での調査で話を伺った人々の声を僕が録音し、内容を全て文字として記録、

報告書としてまとめました。文字起こしをした結果、2万字を超える文章になりました。まとめるのがとても大変でした。

それではまず初めに、大槌町での東日本大震災の被害について説明していきます。

発災日時は、2011年3月11日午後2時46分頃に発生しました。マグニチュードは9.0です。本震による震度で、大槌町の最大震度は6弱を観測しました。被害状況として、死者行方不明者は1,286名です。

そして次に、震災を経験した3名の聞き取り調査の内容について説明していきます。少し文章が多くなってしまい申し訳ないです。

○神戸学院大学2 最初に聞いた方は、小國夢夏さん、15歳です。小國夢夏さんは、当日は午前授業で家に帰っていて、母と買い物に出かけて帰っていた途中に地震が発生しました。5つ下の妹と合流するために赤浜小学校へと避難しました。もし1人だったら、小國夢夏さんは絶対に逃げてないと話されていました。お母さんが逃げていたから一緒に逃げたそうです。あと、小國さんは、地震が来たら津波が来るという認識が全くなく、誰かが逃げたから逃げたそうです。震災を振り返って、もし1人だったら絶対逃げていない。大槌町の好きなところは、ご近所付き合い、つながりの強さ。近所では挨拶、コミュニケーションが当たり前だったそうです。

2人目が菊池チア子さん、70歳です。前の晩に地震が来ることを予言していたそうです。菊池チア子さんは1960年にチリ地震の津波被害を経験していて、その経験も役立って、周りの人たちも逃げれば間に合う、



10分、15分の逃げる時間は必ずある、お金や宝石を取りに一度家に戻ったりしてはだめ、当時やっていた店のバイトの人たちにもそれを言って、みんな助かったそうです。

あと、菊池チア子さんぐらいの年代の人たちは頑固な人たちが多くて、逃げる気のない人たちもいて、そういう人たちには何を言っても無駄と言っていたんですけど、僕たちがそういう人たちにどう言ったら逃げるかとかを考えたいと思いました。

最後に3人目は、岩間敬子さん、59歳です。東日本大震災で大槌町の町長が亡くなったときに、岩間敬子さんは復興食堂を始めました。同じ会社の知人から、津波がもう来ているから自分を優先して逃げてと言われ、車に乗り急いで上に向かいました。土ぼこりが増えて火事の煙のように感じた。車を捨て坂を走った。2つ後ろの車は瓦礫の波で見えなくなり、1つ後ろの車の人を助けながら坂を上がっていったそうです。

震災の年の11月11日に復興食堂を始めました。大槌の行政は全く機能しておらず、役割を決め、住民の団体がおのおの対応していたそうです。復興食堂は、ボランティアの方々に大槌のおいしい温かい食事を食べてもらって、ゆっくりしてほしいという支援者をいたわる思いからできたそうです。

岩間さんは、自分の命は自分でしか守れないと何度も訴えかけるように話されました。一住民であっても自分の考えを蓋するのではなくて、勇気を出して自分の意見を述べることは大切だと伝えられました。

### ○神戸学院大学3 次に、岩手県岩泉町についてお話しします。

まず私たちは、8月5日に岩泉町にて、岩泉町役場での聞き取り調査を行いました。そこで聞き取り調査に応じてくださった立花宗佳さん、佐々木久幸さんに当時の被害状況と今後の対策についてお話を伺いました。

初めに、平成28年台風10号の説明をします。この台風により岩手県内で多くの土砂災害が発生し、河川の氾濫が発生しました。こちらの写真のように、小本川も氾濫しました。そして岩泉町では、高齢者施設「楽ん楽ん」の9人を含んだ26人が亡くなりました。

こちらは実際に小本川を視察したときの写真です。

ここから、当時の災害への対応についてお話しします。台風10号発生時に町が対策本部を立ち上げ、早めに避難準備情報を発信していたんですが、その指揮を執っていたのが先ほど紹介した佐々木久幸さんです。



ここで、なぜ死者が出てしまったのか、それは情報解釈の食い違いが役場側と「楽ん楽ん」側で起こってしまいました。役場側は、避難準備情報で避難してくれるだろうということで情報を発信したのですが、「楽ん楽ん」側は、避難準備情報を避難準備をして一応避難できるようにしておこうというふうに捉えてしまって、避難が遅れてしまったそうです。

### ○神戸学院大学1 岩泉のまちづくりとして、防災士の育成や連絡協議会、ドローンの活用、避難所の増設などがあります。ですが、防災体制の強化、情報発信の変化では命は守れません。

岩泉町では、地域住民と協力して逃げる、他施設と協力して逃げる、住民と行政の組織化という避難計画を行っていることが分かりました。山に囲まれて住む場所が限られている岩泉に適した避難方法であることで、この避難方法を私たちは「岩泉メソッド」と名づけました。

この「岩泉メソッド」とは、小本川付近に位置する「フレンドリー岩泉」と「岩泉乳業」が協力し合う訓練を行っていること、これは災害時に高齢者のことを運び出すという協力体制を得ていることです。また、台風10号の被害を受け、改めて各世帯に防災マップを配布していること、そして日頃から地域住民とのコミュニケーションを大切にしていること、これらが住民と行政の組織化を意識した対策なのだと分かりました。

私たちが学んだことは、実際に現地に行かなければ知らなかった情報が非常に多かったことです。また、現地に赴き、話を聞いて考えることの大切さが分かりました。そして、情報は伝えるだけでは人々は動かせません。情報発信の日々の積み重ね、活動を継続させること、過去の災害の歴史を継承させる大切さを学びました。

ご清聴ありがとうございました。

号外 全力！学院タイムズ

編集・発行  
クローズアップ  
社会研究会新聞局

全力！学院タイムズ 2023年  
(令和5年) 1月発行

号外

# 社会になぜを問いかける

クローズアップ  
社会研究会



社会をもっと知りたい！という気持ちから一昨年5月に発足したクローズアップ社会研究会。現在は、神戸学院大学現代社会学部を中心とする学生と、同学部教授の安富顧問の合計11名で研究会を構成する。

活動分野は、政治やスポーツ、芸能、そして防災に至るまで幅広い分野に興味・関心を持ち、なぜ!?という疑問を大切に、歴史的背景や物事の構図などを知り、研究を行い、発信している。

メモアクでは、「選挙と防災」という、ユニークなテーマに着目した！

## クロ社研の活動

### メモアク2023での軌跡



最終発表では、**投票者視点**を調査。大学生に対して「選挙と防災の意識のアンケート」を行い、そこから立候補者視点と投票者視点での、選挙と防災の関係性を見出した。

中間発表では、**立候補者視点**に注目。第26回参議院議員選挙の兵庫県選挙区の候補者の公約を基に、社会に対して防災や災害がどの程度取り組むべき事項として取り上げられていたのかを調査した。

#### アンケート [投票者視点]

目的

- ・投票者が防災の項目を意識して投票しているのかを知るため
- ・その意識は、社防と社防以外で違いがあるのかを知るため

対象者

- ・神戸学院大学 学部生
- ・社会防災学科とそれ以外の学部学科



### 全力！学院タイムズの発行



### メディアの力を借りて社会に発信！



興味を持たなくて興味を持たないことによって政治が公約とかにあげないというのが



新聞記事やSNSを通して候補者や支援者の話した内容を発信

学院タイムズ  
バックナンバー  
はこちら！⇒



○**神戸学院大学4** 皆さん、こんにちは。私たちは、神戸学院大学から来ましたクローズアップ社会研究会、略してクロ社研です。発表を担当するのは、名越と服部と為乗です。よろしくお願いいたします。

それでは、発表に移ります。

本日の発表の流れは以下ようになっております。1番のクロ社研とはから、3番の候補者視点までのところは、中間報告会でお話ししましたので、今回は軽く触れていきます。今回メインでお話しするのは4番、投票者視点のアンケート調査です。そして最後に、まとめとして選挙と防災の調査で締めくくりたいと思います。

まず初めに、クロ社研がどんな団体なのかについて説明していきます。

クロ社研は、マスコミや政治を中心に、その他文芸やスポーツなど、社会のあらゆる分野を自由、そして包括的に学び、研究することを目的とし設立した団体です。つまり、防災に特化した団体ではないということがこの団体の特徴でもあります。

○**神戸学院大学5** 今回、クロ社研は選挙という観点から防災にクローズアップしたいと思います。

クロ社研では、選挙期間中、出陣式や街頭演説などに足を運び研究をしています。その研究の様子を新聞という形でフィードバックをおこなったり、SNSで日々情報発信をしています。

そんなクロ社研は、今回、候補者視点と投票者視点の2つの視点から防災を考えていこうと思います。

まず、候補者視点についてです。昨年7月10日に参議院選挙が行われました。私たちは、立候補者の選挙公約から防災を掲げていた人について調べました。調べたのは、兵庫選挙区に立候補した13名の候補者の選挙公約です。

こちらが主な公約に防災を掲げている人の要約になります。国土強靱化についてや、阪神・淡路大震災の

教訓について掲げられていました。まとめると、選挙公約に防災を掲げていた人は、13人のうちたったの2人ということが分かりました。このことから、選挙で防災に重きを置いている候補者の数が少ないことが分かりました。

ここまでが中間報告の内容となっております。

○**神戸学院大学6** ここからが今回の最終報告のメインテーマである投票者視点についてです。

最終発表に向けて、今回は投票者視点ということで、選挙に行く人に焦点を当ててアンケートをとりました。投票者が防災の項目を意識して投票しているのか、また、その意識はふだんから防災に興味・関心を持っている人と持っていない人で違うのだろうか、そして最後に、投票する際に意識している公約の違いなどを知ることを目的にアンケートを行いました。

神戸学院大学には、防災を専門に学んでいる社会防災学科があります。その学科生とほかの学科生にそれぞれアンケートをとり、投票時の意識の違いなどがあるのかについて調査しました。

アンケートの質問項目には、参議院選挙、兵庫県知事選挙に行ったかどうか、投票するときに何を重要としているか、選挙公約に防災を入れるべきかといったことを選びました。このようなアンケートを行うことで、10代、20代前半の若者世代がどのようなことを意識して投票しているのかについて知ることができると思い、このような質問にしました。

こちらがアンケートの実施概要になります。12月6日から12月26日までの期間でアンケートを実施しました。大学の講義内でお時間をとっていただいたり、ツイッター、インスタグラムなどのSNSで拡散などをいただき、皆さんの協力を得て179名の回答をいただきました。内訳は以下のとおりです。社会防災学科とそれ以外の学科の回答者数は、ほぼ同数集めました。

まず、第26回参議院選挙、兵庫県知事選挙の際、どのくらいの方が選挙に行っていたのかについて調査を行いました。まず、参議院選挙のほうから紹介します。このグラフから、約半数の人が選挙に行っていることが分かりました。

続いて、こちらが兵庫県知事選挙のグラフです。こちらの項目には、選挙権なしという項目があります。1人暮らしの大学生の中には、住民票を移していない、県外から通ってきている学生がいるため、選挙権がないという方も3分の1程度いました。た



だ、選挙権がある人に着目しても半分以下しか投票に行っていないということも分かり、若者の投票率の低さを再認識しました。

次に、公約に防災対策を入れるべきかどうかという質問を行いました。その結果、約半数が「そう思う」「とてもそう思う」と回答してくださいました。その割合は、実に62.5%でした。このことから、候補者により防災対策を取り入れてほしいという投票者が多いことが分かりました。

そして、投票する際に最も重視する政策は何かという質問を行いました。回答項目は、経済・財政問題、コロナ対策、外交・安全問題、社会保障制度、環境・エネルギー問題、憲法改正、そして防災対策、その他の8項目で行いました。この中で防災を選んだ人はわずか3.9%しかおらず、選挙においてあまり防災が意識されていないのかなというふうに見えます。

そしてここからは、社会防災学科と社会防災学科以外の学生でアンケート結果にどのような違いや共通点を得ることができたのかについて発表していきます。

まずは、先ほどあった選挙公約に防災を入れるべきかという質問に対する回答を比較していきます。赤色と黄色が防災を取り入れてほしいという人の割合を表しており、青色が反対派の回答になっております。この赤と黄色の割合の合計で社会防災学科とそれ以外の学生で比較すると、66.4%と57.8%となりました。社会防災学科のほうが、防災を公約に入れてほしいという人が多いという結果になりました。

次に、投票する際に最も優先している事項は何かという質問に対してです。このグラフから分かることとして、青色の部分である経済・財政問題を第一優先事項として答えた人の割合は、どちらも約60%とあまり変わらないことが分かりました。

こちらがそれぞれ上位の3つの項目を表しています。社会防災学科は、同率ではありますが第3位に防災の項目が入っていました。それに対して社会防災学科以外の学生は、防災の項目は第7位となっていました。割合として見てみると、社会防災学科は6.7%、社会防災学科以外の学生では1.2%と、防災を重視している割合が異なっているということが分かります。このように、ふだんから防災を専門に学び、関心がある人は防災の項目を最重要視していると考えられます。

最後に、アンケートの結果から考察したものです。選挙公約に防災を入れるべきという人が多いことから、候補者が積極的に防災の項目を取り入れると、投票者は今まで以上に防災を意識するようになるのでは



ないかと考えました。

考察1からも分かるように、防災対策を公約に入れるべきだという人は多数いましたが、最重要視している方は少ないということが分かったと思います。だからこそ、どうしたら最重要項目に上げる人が1人でも増えるのか、また、最重要項目ではなくてもどうしたら防災対策の優先度が1つでも上がるのかについて、今後の課題として考えていきたいと思っています。

以上で発表を終わります。ご清聴ありがとうございました。

# 関西大学

## 社会安全学部 奥村研究室



災害関連死で亡くなられた方が直面した食問題とは？  
- 阪神・淡路大震災の教訓は生かされているか -

関西大学大学院 社会安全研究科  
M1 山崎健司

Graduate School and Faculty of Societal Safety Sciences

FSS

### 阪神・淡路大震災の教訓は生かされているのか？ 災害関連死で亡くなられた方が 直面した食問題とは？

山崎 健司 Kenji YAMASAKI / 関西大学大学院 1回生  
栗田 直樹 Naoki KURITA / 関西大学 4回生  
菅野 圭汰 Keita KANNO / 関西大学 3回生

#### 背景・目的

災害関連死は、被災後の大きな精神的ストレスや劣悪な生活環境によって発生する。初めて社会的に認知されたのは阪神・淡路大震災であり、今から28年前のことである。その後も関連死は繰り返されている。2011年東日本大震災では3789名、2016年熊本地震では218名が関連死で亡くなった。阪神・淡路大震災の教訓は生かされているのか？災害関連死は、死因が多様であり、かつ、同一の死因であっても死に至る経緯が多様であるなど、解決すべき課題を絞れないことが課題である。

災害関連死で亡くなられた方々を取り巻く環境の変化やそれらが心身に及ぼす影響とはどのようなものであったのかを可視化する。東日本大震災における気仙沼市の事例をもとにして、災害関連死で亡くなられた方々が直面した食問題を明らかにする（体調不良に関するものは除く）。

#### データ

気仙沼市から提供を受けた関連死等の申立書（関連死認定を受けた109件）



図1 関連死等の申立書

- A. 災害前の脆弱性(社会的, 心身的)
- B. 社会機能の低下・損失
- C. 個人を取り巻く環境の変化
- D. 心身機能の脆弱化・損失, 発病
- E. 心身への外力作用
- F. 関連死の死亡原因

#### 手法

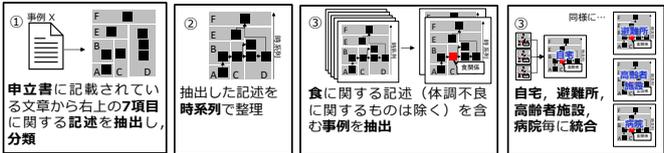


図3 作業の流れ

#### 結果

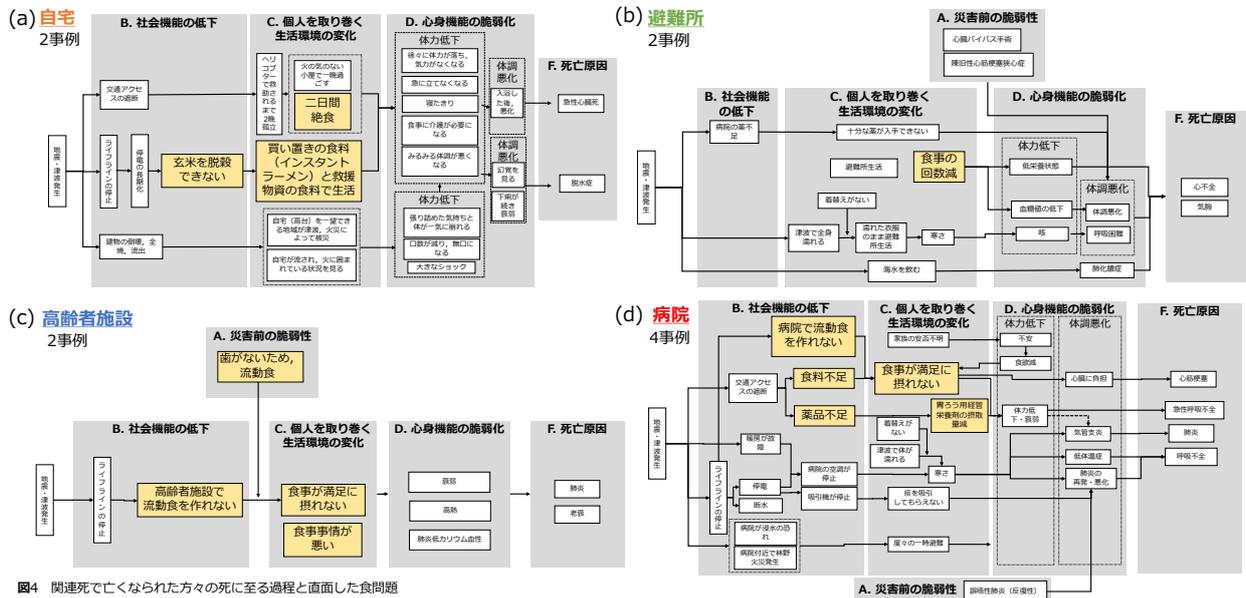


図4 関連死で亡くなられた方々の死に至る過程と直面した食問題

- (a) ・ 自宅の停電長期化に伴い、食生活の乱れが長期化
- ・ 孤立した避難場所で2日間絶食（自宅で食問題に直面したわけではない）
- (b) ・ 避難所で食事回数が減少し、低栄養状態、血糖値低下
- (c) ・ ライフラインの停止に伴い高齢者用の流動食が作れず、満足に食事が取れず衰弱。
- (d) ・ ライフラインの停止に伴い患者用の流動食が作れず、満足に食事が取れず衰弱
- ・ 患者用の栄養剤の不足により衰弱。

#### 結論

1. 物資不足や調理環境の悪化が長期化し、栄養不足や栄養の偏りが発生している様子について、自宅、避難所、病院、高齢者施設に分けて可視化した。犠牲者を取り巻く様々な環境の変化の中で食の問題がどのような位置付けにあるのかを把握することができる。
2. 阪神・淡路大震災では、これらの問題がどのように認識され、どのような教訓が導かれたのか。誰がその教訓を使い、東日本大震災における気仙沼市の犠牲者がどれだけ軽減されたのか、さらに分析を進めたい。ただし、2000年以降、我が国の医療・介護体制は大きく変化した。当時の教訓がそのまま現在にも適用するとは限らない。



○**関西大学 1** 関西大学社会安全学部の栗田と申します。災害関連死で亡くなられた方々が直面した諸問題とは、阪神・淡路大震災の教訓は生かされているのかをテーマに、関西大学大学院社会安全学部奥村研究室の山崎健司が発表いたします。

○**関西大学 2** まず背景です。災害関連死は、被災後の大きな精神的ストレスや、劣悪な生活環境によって発生します。初めて社会的に認知されたのは阪神・淡路大震災です。今から28年前のことです。

こちらの災害関連死が発生した主な災害に注目してください。1995年阪神・淡路大震災以降、その後も関連死は繰り返して起こっております。特に2011年東日本大震災では3,789名、熊本地震では218名の方が関連死で亡くなりました。果たして阪神・淡路大震災の教訓は生かされているのでしょうか。

災害関連死は死因が多様であり、かつ同一の死因であっても死に至る経緯が多様であるなど、解決すべき課題を絞れないことが課題です。

目的です。災害関連死で亡くなられた方々を取り巻く環境の変化や、それらが心身に及ぼす影響とはどのようなものであったのかを可視化します。

また、東日本大震災における気仙沼市の事例をもとにして、災害関連死で亡くなられた方々が直面した食問題を明らかにします。ただし、体調不良に関するものは除きます。

データです。関連死等の申立書を用いました。このデータは、公文書公開請求により気仙沼市から入手したものです。東日本大震災で気仙沼市に受理された182件、そのうち認定件数は109件でした。この109件をもとに今回は分析をしております。

手法です。申立書に記載されている文章から以下の7項目に関する記述を抽出し、分類しました。109事例分類することができました。この7項目とは、A、災害前の脆弱性・社会的心身の脆弱性、B、社会機能の低下・損失、C、個人を取り巻く環境の変化、D、心身機能の脆弱化・損失・発病、E、心身への外力作用、F、関連死の死亡原因、この7項目に記述を抽出し分類しました。

そして、この抽出した記述を時系列で整理することができました。そして、時系列で整理したものを、食に関する記述（体調不良に関するものを除く）を含む事例を抽出しました。10事例抽出しました。この食に関する記述を含む抽出した10事例を、さらに自宅、避難所、高齢者施設、病院ごとに統合しました。

続きまして、食べ物の問題が自宅ではどのような問題、どのように出てきていたのか、そして、ほかの食の問題とほかの要因とどういう関係にあったのかというものを丁寧に見ていきます。

自宅の場合です。地震が発生し、孤立案件の多発が起こりました。ヘリコプターで救助されるまで二晩孤立しました。その間、2日間絶食の状態でした。そして、2日間絶食した後、心身機能の脆弱化が起こり死に至ったものと考えられます。つまり、長期の救助待ちでの孤立した避難場所にて2日間絶食（ただし、自宅で食問題に直面したわけではございません）。

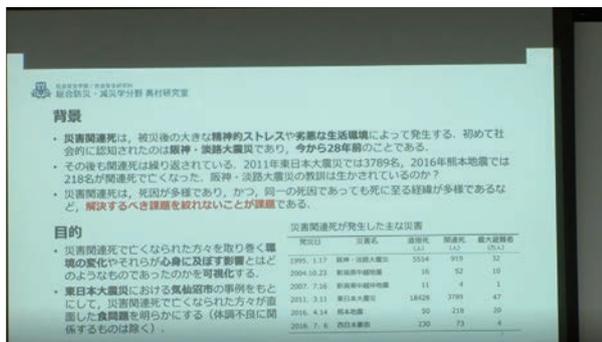
こちらの事例では、地震、津波が発生し、ライフラインの停止が起こり、停電の長期化が起こりました。この停電の長期化が起こったことにより玄米を脱穀できない状況になり、買い置きの食料（インスタントラーメン）と救援物資の食料で生活することになりました。この食生活の乱れが長期化することによって心身機能の脆弱化を引き起こし、死につながったものと考えられます。つまり、自宅の停電長期化に伴い、食生活の乱れが長期化したということが明らかになりました。

避難所について見ていきます。ここでも先ほどと同じく、食べ物の問題が避難所ではどういうふうな形で出てきて、食べ物の問題とほかの要因とどういう関係にあったのかというものを可視化しました。

この方は、避難所で食事回数が減少することによって低栄養状態、もしくは血糖値が低下するという心身機能の脆弱化を引き起こし、死につながったものと考えられます。

高齢者施設です。地震が発生しライフラインの停止が起こり、高齢者施設で流動食がつかれないという状況に陥りました。災害前の脆弱性として、歯がないため流動食であったという状況があったため、個人を取り巻く生活環境の生活変化により食事が満足にとれない、食事事情が悪いという状況が起こり、心身機能の脆弱化を引き起こし、死につながったものと考えられ





題がどのような位置づけにあるのかを把握することができます。

今後、阪神・淡路大震災ではこれらの問題がどのように認識され、どのような教訓が導出されたのか、誰がその教訓を使い、東日本大震災における気仙沼市の犠牲者がどれだけ軽減されたのか、さらに分析を進めたいです。ただし、2000年以降、我が国の医療、介護体制は大きく変化しました。当時の教訓がそのまま現在に通用するとは限らないです。

これで関西大学大学院社会安全学部奥村研究室の発表を終わります。ご清聴ありがとうございました。

ます。ライフラインの停止に伴い高齢者用の流動食が  
つくれず、満足に食事がとれず衰弱ということが明らか  
になりました。

病院です。ここでも食べ物の問題が病院ではどうい  
うふうな形で出てきており、ほかの要因と食の問題が  
どういう関係にあったのかというのを見ております。

地震が発生することにより交通アクセスの遮断が起  
こりました。そこで食料不足や薬品不足が引き起こさ  
れ、食料不足の場合、食事が満足にとれない、そして  
心身機能の脆弱化、体力の低下につながったと考えら  
れます。薬品不足の場合、医療用の栄養剤の摂取量が  
減っており、体力低下につながったものと考えられて  
おります。

また、地震、津波発生によりライフラインの停止が  
起こり、病院で流動食をつくれないう状況に陥り、食  
事が満足にとれないという個人を取り巻く生活環境の  
変化につながったものと考えられます。つまり、ライ  
フラインの停止に伴い、患者用の流動食がつくれず、  
満足に食事がとれず衰弱、患者用の栄養剤の不足によ  
り衰弱したというこの2つが明らかになりました。

結論です。災害関連死で亡くなられた方々が直面  
した食問題について明らかにしました。病院、高齢者  
施設、自宅、避難所、この4つの避難場所にカテゴ  
リーし、食問題を明らかにすることができました。

まず、病院、高齢者施設では、ライフライン停止  
の長期化に伴い、患者や高齢者用の食事（流動食）  
を長期間提供できず、満足に食事がとれない状況が  
明らかになりました。自宅では、在宅避難者も停電  
の長期化に伴い、食生活の乱れが長期化しました。  
また、避難所では食事回数の減少に伴い、低栄養  
状態が起こったことが明らかになりました。

つまり、物資不足や調理環境の悪化が長期化し、  
栄養不足や栄養の偏りが発生している様子につ  
いて、自宅、避難所、病院、高齢者施設に分けて  
可視化しました。犠牲者を取り巻く様々な環境  
変化の中で、食の問

# 兵庫県立大学

## 防災リーダー教育プログラムチーム

テーマ：未災者から未災者へ



### 兵庫県立大学学生が案内する HAT神戸なぎさ地区語り継ぎツアー

#### 趣旨・概要

未災者から未災者へ震災の教訓を語り継ぐことを目的とする。

防災・減災を学ぶ大学生がHAT神戸なぎさ地区の案内役となってツアーガイドを行った。

#### プロセス

##### 事前調査



HAT神戸の歴史などを調べたり、自分たちでまちあるきを行った。

##### ヒアリング



住民さんから地域のことや平時からの取組みについて聞き取りを行った。

##### 本番



実際にまちあるきをしなが、住民さんの取組みやなぎさ地区の紹介をした。



**地域福祉センター**  
高齢者や子どもたちの心の拠り所となる施設。災害時は要介護者のための福祉避難所となる。



**路地花壇**  
交流の拠点として路地に花壇設置されている。車椅子の人や高齢者にも使いやすいデザインに。



**灘の浜小学校 & 灘さくら支援学校**  
小学校と支援学校が併設された学校。エレベーターやスロープがあり、避難所に指定されている。



**街の入り口**  
なぎさ地区の概要を説明。この地域には災害復興公営住宅が並ぶ。「近助」を合言葉に防災自治組織が活発に活動している。



##### ポンプ

震災火災を教訓に災害時に生活用水などとして水が使えるように設置された。遊具として子どもたちも遊びながら防災を学ぶことができるようになっている。



##### 安否確認訓練

集合住宅においてマグネットをドアに貼り、安否確認訓練を行う。まちづくり協議会が左図のマグネットを作成。



##### かまどベンチ

平常時は公園のベンチとして利用。非常時には、ベンチの座面を取り外すことで、煮炊きや暖をとることができる「かまど」機能を併せ持つ防災設備。

#### 実施概要



- 開催日時  
2022/10/22(土)  
10:45~11:45
- 参加者  
20名ほど(大学生 & 一般から)

#### 振り返り



##### 〇意見

- 地域の交流や助け合いが大切
- 共助が大事
- 伝えるのは難しい
- 防災のこと少しでも知る
- 災害の知識を学ぶ
- 被災経験の有無は関係ない

○**兵庫県立大学 1** 兵庫県立大学防災リーダー教育プログラム専攻の田中修弥です。

○**兵庫県立大学 2** 四方喜成です。

○**兵庫県立大学 1** これから活動報告をさせていただきます。よろしくお願いします。

私たちは「未災者から未災者へ」というテーマで、10月にHAT神戸のなぎさ地区で語り継ぎツアーを行い、その取組を踏まえて、12月に小学校出前講座を行いました。それぞれの活動について順番に発表します。

まず、語り継ぎツアーの概要ですが、これは「ぼうさいこくたい」と同じ日の10月22日土曜日の午前中に約1時間行いました。内容は、被災者から震災の記憶や教訓を聞いて、その聞いたことを街歩きという形で未災者に伝えるものでした。

準備は8月から始まり、初めにHAT神戸について調べたり、実際にまちに入ってみました。そして、9月にヒアリングを行い、ツアーのプログラムを考えていきました。9月末からはチラシやマップなどをつくり、リハーサルを経て当日を迎えました。

準備をしていく中で、私たちはHAT神戸について学んだだけでなく、住民さんに出会い、そこでの取組を知りました。なぎさ地区で精力的に活動されている住民さんは、退職のタイミングで知人に声をかけてもらって、地域に入っていくそうです。いざというときに、お隣さんだけでも助けられるようつながりづくりをしていくことが防災になると話をされていました。住民さんからのヒアリングを経て、私たちは日常の中に防災があるということ、そして震災から現在までの住民さんの取組や頑張りを伝えたいと考えました。

そこで、実際に街歩きをしながら説明をするツアーという形をとりました。このスライドはツアー実施の様子です。ポイントを幾つか設定し、それぞれのポイントで各担当者が説明を加えました。団地の入り口のところでは、HAT神戸のことや団地についての説明をしました。

右の写真は、コロナ前までやっていたコミュニティカフェの跡地です。ここでは、兵庫県立大学の学生がコーヒーやお菓子を提供し、そこに住民さんが集まることで孤立を防ぐような役割として機能していました。

続いては、なぎさ地域福祉センターです。ここは普

段、ふれあい喫茶や趣味の集まりの場となっていて、非常時には福祉避難所となります。安心して過ごせる場所として、住民さんの心のよりどころとなっています。

続いて右側は、まちができた当初からある花壇で、車椅子の人でも手入れがしやすい高さになっています。次第に花壇の手入れに関わる人も増え、新たな交流ができるきっかけとなっています。

続いては、ハピータウンKOBEです。ここも指定の福祉避難所となっています。コロナ前までは、なぎさ防災福祉コミュニティと合同で防災訓練を行うなど、連携をとっていました。

右側の写真は、併設されている灘の浜小学校とさくら支援学校です。ここは一般の避難所で、エレベーターがあったり、また屋上にプールがあることで非常時に水が使えるなど、ハザードを想定した造りとなっています。

続いては、こちらはかまどベンチです。ふだんは公園のベンチですが、災害時には料理ができたり、暖を取ることができます。

右側の写真は手回しポンプで、震災の火災の教訓から、災害時に水が使えるようにと設置されました。遊具として子供たちも遊びながら防災を学ぶことができます。

ツアーの後日、振り返りを行いました。成果としては、神戸の中でもHAT神戸のなぎさ地区について参加者に知ってもらえたことや、住民さんの取組や頑張り、そしてつながりの大切さについて伝えられたのではないかと考えています。

一方で課題としては、もっと住民さんとの関係を深められていたらもっといろいろなお話を聞いたのではないかと感じていたり、自分たちの考えや感じたこと、思いを深められたらよかったと思いました。

また、やり方の面でも参加者との相互のやりとりなどを取り入れれば、より深い学びになり、その後の行動変容も期待できるのではないかと感じました。

以上のことを踏まえて、12月の小学校出前講座では、震災の教訓と自分たちのメッセージを組み込んだクロスロードゲームを実施しました。

続いては、小学校出前講座の取組を紹介します。

○**兵庫県立大学 2** 出前講座は尼崎小田高校の主催で、先月の20日に尼崎市立立花西小学校にて行われました。そのうちの1コマを使って、私たち大学生が防災クロスロードゲームを実施しました。ツアーや独自の

講義などで学んだことを未災者である小学生に伝え、将来の地域防災を担う防災リーダー育成のきっかけの場をつくることを目的としています。

クロスロードゲームは、7、8人のグループに分かれて行います。まず、正解がない問いについてAとBの選択肢を与え、どちらかに分かれてもらいます。次に、その理由をグループ内で発表し合います。最後に、その問いのポイントや過去の教訓を解説するという流れです。1問当たり10分、これを3問繰り返しました。

私たちが出題した正解のない問い、例えば、地震の被害を減らすなら建物を強くするべきか、それとも地域づくりに力を入れるべきか。別の問いでは、もし避難所にいたとして自分しか食料を持っていない場合、周りの人に配るか、それとも配らないか、こういうような2択問題になっています。

次に、選択肢と選んだ理由をクロスノートと呼ばれる用紙に書いてもらいます。クロスロードゲームでは、明確な自分の意見を持つことが大事です。自分ならこうするなと想像して、しっかりと意見を書いてくれました。

グループには学生と高校生が進行係として入り、AとBそれぞれの理由を、それぞれの立場の児童に理由を聞いて発表してもらいます。自分と違う意見の人の理由もしっかりと理解する必要があります。

意見交換が終わると、図や写真を用いて問いの解説を行います。AとBどちらが正解かは人それぞれだけれど、防災においてはどちらの考え方も大切だということを伝えました。ゲーム形式にすることで、自分ごととして捉えるという効果があったように思います。

3問の問題が終わった後、まとめとしてメッセージを伝えました。一つは、地域のつながりがいざというときに自分を助けることになる。もう一つは、避難所生活、避難生活をあらかじめ想定しておこうということです。街歩きツアーの際に住民さんが語っておられた教訓をここに組み込んで、メッセージとして伝えることができました。

講座の実施後、児童たちに感想を書いてもらいました。災害時のイメージをすることができた、いざというときに自分で自分の意見を決められるようになりたい、それから、自分1人の力では命を守れないと思った、こういう意見がありました。

児童たちは今後、保護者に向けて学んだことを発表する場を設けるそうです。私たちが伝えた教訓やメッセージ、そして自身が感じたことをたくさんの人に伝えてほしいと思います。私たちが目指す未災者から未



災者へのリレー、そのバトンパスができたのではないかと思います。

最後に、学生たちで振り返りを行いました。成果としては、防災に必要な知識や考え方を児童たち自身で考えてもらうことができた。そして、共助や近助というメッセージを伝えられたことが上げられます。

課題は、事前に学生が行ったシミュレーションと実際に小学生相手に行うゲームでは、時間配分に大きな差が出ました。そして、問題と解説を小学生向けに分かりやすくする必要があったと考えました。

最後に、副専攻1年間を通じての総まとめです。

成果として上げられるのは、街歩きツアーの後に成果や課題を洗い出す時間をとり、有意義な振り返りができたことです。最終的に出前講座の成功につながることができました。

街歩きツアーにおいては、阪神・淡路大震災の教訓を未災者に伝えることができ、被災者から未災者への橋渡し役を未災者である私たち自身が担うことができたと思っています。ただ、活動を通じて事実や出来事は伝えられた一方で、被災者の心の中、心情や気持ち、葛藤、それらを聞き出してたくさんの人に伝えることは難しいと感じました。

そして、なぎさ地区のツアーとこれからの防災、これは小学校の出前講座についてですが、その2つを結びつけるのが想像以上に難しかったです。来年度、副専攻に取り組む学生にも成果と課題を共有し、私たちの思いをつなげてもらいたいと思っています。

これで発表を終わります。ご清聴ありがとうございました。

# パネルディスカッション

## テーマ：創るをシェアすると・・・

### 【コーディネーター】

- 明石工業高等専門学校 講師 本塚 智貴さん
- 人と防災未来センター研究部 主任研究員 林田 怜菜さん

### 【グラフィックファシリテーター】

- 大阪防災プロジェクト 共同代表 多田 裕亮さん
- 山越 香恋さん

### 【パネリスト】

- TEAM-3A 堀 一葉さん
- 明石工業高等専門学校  
D-PRO135°（明石高専防災団）開発チーム  
奥田 耕太さん  
D-PRO135°（明石高専防災団）地域連携チーム  
山森 陽太さん
- 神戸学院大学 クローズアップ社会研究会  
為乗 湧司さん
- 兵庫県立大学 防災リーダー教育プログラムチーム  
田中 修弥さん

○司会 それでは、パネルディスカッション「KOBEのことば」を始めます。

今回、パネルディスカッションのテーマは「創るをシェアすると・・・」です。

未災者から未災者へと語り継ぐことを目指す学生たちの活動は「聴く」ことから始まり、新聞、ゲーム、ヒアリングシートなど、様々な形の「創る」で表現されています。学びがあるからこそ「創る」ことができます。その「創る」をシェアすることで活動に新たな化学反応が生まれ、広がりをもたらし、より勢いづけるのではないのでしょうか。

今回は、学生の皆さんに「創る」に対する思いを語っていただき、未災者の「創る」に込められた思いをシェアしたいと考えています。

この時間は、できるだけ会場の皆さんでディスカッションできる活発な意見交換の場づくりを目標にしたいと思います。

出演者を紹介します。コーディネーターを担当していただきます明石工業高等専門学校講師、本塚智貴さんです。そして、人と防災未来センター主任研究員、林田怜菜さんです。

続きまして、パネリストとして、TEAM-3Aの堀一葉さん。明石工業高等専門学校 D-PRO135° 開発チームの奥田耕太さん。同じく、地域連携チームの山森陽太さん。神戸学院大学クローズアップ社会研究会の為乗湧司さん。兵庫県立大学防災リーダー教育プログラムチームの田中修弥さんです。

本日、グラフィックファシリテーションをしていた

だいている方々をご紹介します。大阪防災プロジェクト共同代表の多田裕亮さん、そして、山越香恋さんです。どうぞよろしくお願いいたします。

そのほか、本日まで参加いただいている学生さんや関係者の皆様も意見交換にぜひご参加ください。

ここからの進行は、コーディネーターの本塚さんと林田さんをお願いしております。

それでは、よろしくお願いいたします。

○本塚コーディネーター それでは、これから大体1時間10分ぐらいをめどにパネルディスカッションを進めていきたいと思います。

担当は、先ほどご紹介いただきましたが、明石高専の本塚と。

○林田コーディネーター 林田です。

○本塚コーディネーター よろしくお願いいたします。

皆さん緊張しているようなので、まず簡単な質問から。簡単かどうか私が言う話ではないんですけども、今回のテーマというのは、「創るをシェアすると・・・」という話なんですけど、シェア、今回中間発表会であったりキックオフ会の中でチームの活動であったり、作成されたものを体験してもらったり、そのブラッシュアップであったり、そういったことを体験してもらったんですが、その話を中盤でしたいと思います。

まずは、それぞれのチーム、例えばTEAM-3Aさんはゲームをつくって出前講座をつくっている。D-PROさんもゲームと出前講座。クロ社研さんはアンケートシートをつくって成果を新聞としてつくる。そして県立大学さんは語り継ぎのツアーであったり出前講座をつくる。それぞれのチームが「創る」という行為をしているんですけど、つくるときに一番自分たちにとって楽しいところ、どこが楽しいのか、またつくったものに対してどんな反応があったときに一番うれしく感じたのかを、ぜひそれぞれにまずは聞きたいと思いますので、まずはTEAM-3Aさんからよろしくお願いいたします。

○堀さん まず、ゲームをつくるときに一番楽しいところは、つくるときにみんなでわいわい話したりするところが一番楽しいということとか、ゲームのコンセプトが楽しいゲームをつくりたいというのが強いので、楽しんでもらえるようにということで、実際クイズとかを自分たちでやってみたりであったりとか、自分たちで試しでやっているときに盛り上がっているときに一番楽しいと思います。

実際にゲームをやっているときに、高校生やのにこんなことやってるのすごいねって言われたりすると素



直にうれしいし、ゲームをやって楽しいって言われたりすると、やっぱりこっちも作ったかいたがあったなと思ったりとか、こういう防災の方たちの前でやったりとかすると、逆にこういうふうにやったらいいんじゃないみたいな改善案が出たりするのも、自分たちが前進していくためにっていうのすごく楽しい気持ちになったりはします。

○本塚コーディネーター ありがとうございます。

では次に、D-PROの開発班、お願いします。

○奥田さん 開発班として、これまで何種類か防災ゲームをつくってきたんですけども、基本的に防災ゲームをつくるときってというのは、まずは対象とする災害が起こったときの状況をゲームに忠実に落とし込むということをするんですけど、忠実に落とし込んだゲームをしてもゲーム性があまりなかったり、反応はよくないんですね。退屈であったり、おもしろくなかったというふうなフィードバックが返ってくるので、忠実に再現したゲームをつくった後に、そこにフィードバックをもとに少しずつゲーム性を持たせていくんです。そこでおもしろいことをいろいろ考えないといけないんですけども、いかにゲーム性を取り入れていくかということに対して、いろいろ話し合うという瞬間が一番おもしろいかなと思います。

例えばなんですけども、僕が開発した、先ほどもゲーム開発班の発表にもあったんですけども、「choice」というゲームをつくらせていただいたんですけども、そのときのミッションカードだったりとか、大きさだったりとか、あとはミッションを達成するに当たって、例えば空を飛べるようになるとか、氾濫して浸水した場所をこのターンだけなかったことにできるとか、現実には起こり得ないんですけども、ゲームをする上でちゃんと楽しんでもらうために必要なゲーム性を持たせるということに対して、いろいろ話し合うというところが一番楽しいかなと思います。

○本塚コーディネーター 地域班の方、お願いいたします。

○山森さん 私たちの活動で一番楽しいこと、楽しい瞬間ということなんですけど、実はゲーム開発というのは、皆さんが想像するようなゲーム開発って、恐らくパソコンをたたいて何かやったりとか、机を突き合わせて何かやったりだとかってということがまず第一に思い浮かぶと思うんですけど、実はゲーム開発ってそれだけではうまくいかなくて、私たち地域連携が発表したようなイベントがあってこそそのゲーム開発なんですね。

それは何でかという、予想外がイベントでは起こるからです。その予想外が僕は楽しいと思うポイントなんですけど、何でうまくいかないかという、まず難易度の問題があるんです。私たちがゲーム開発で最も重要視しているポイントは、どの年代でも楽しむことができるゲームを開発するということなんですけど、あまり難易度を高くし過ぎてしまうと、子供がすぐ飽きてしまうようなゲームができる。逆に小さい年代に向けてゲームをつくと、大人と一緒に楽しめなくなってしまったり、防災ゲームとして成り立たなくなってしまうようなことがよくあるんですね。だから、私たちが会議とかでこうかな、どうかなって考えたものを実際にイベントに出してみても、違う反応、私たちが想定していなかったことが返ってきて、どんなゲームが洗練されていくというか、よいものになっていく瞬間が一番楽しいと思う瞬間かなと思います。

やりがいに関しては、僕が一番やりがいを感じたなと思ったのは、ある小学校でのイベントなんですけど、イベントが終わって小学生が帰っていった後に1人だけこっちに寄ってきて、忘れ物かなと思ってたんですけど、すごい今日の授業ためになりました、これから防災について勉強しますみたいなことを言われて、僕すごくうれしくて、帰って「よっしゃ、よっしゃ」ってやってたんですけど、そういう瞬間が一番やりがいを感じます。

○本塚コーディネーター ありがとうございます。

次、クロ社研さん、よろしくをお願いします。

○為乗さん クローズアップ社会研究会は、先ほど紹介したとおりなんですけど、新聞という形でみんなにシェア、共有とかをしているんですけど、楽しい瞬間というのは、全部が楽しいです。私自身、関西の出身ではなくて、栃木県のほうから参っているんですけど、どうしても防災がやりたくて神戸学院大学に来させて

いただいています。やっぱり防災ってフィールドワークとかでいろいろな場所に行くんですけど、全てが全部知らなくて、何も知らない場所で、それ自身が好奇心という楽しさなのかなって私は思います。

- 本塚コーディネーター やりがいを感じるどころ。
- 為乗さん やりがいは、直接的に防災に結びつかなくても、自分の周りの人とつながることができるということです。同じ防災を学ぶという目的があると、人と仲よくできたり、幅広い年齢の人とも、被災した人も被災してない人も、被災してない人には共有できたり、被災者の人からは情報をいただけたりして、自分のコミュニティの輪が広がるというのがすごいおもしろくて、やりがいがあるかなと思います。

- 本塚コーディネーター ありがとうございます。

最後に、県立大の田中君、よろしく願います。

- 田中さん 私が楽しいって感じる瞬間は、メンバーと話し合っているアイデアを出す準備の段階とか、イベント当日であったりとか、いろいろ大変なことはあるんですけど、その課題に対してどうやって解決していくかとかを考えていくのが楽しいなと思いました。

イベントの参加者の反応とかを見たりするのも結構楽しいなと思って、語り継ぎツアーでは、参加者がほとんど大学生で、反応もいまいち分からなくてもややもやしてたんですけど、小学校の出前講座では、結構食いつきがよくて素直で、そのときにやってよかったなというやりがいは感じました。

- 本塚コーディネーター ありがとうございます。

今日のチームの中では、何チームか小学校での出前講座の話とかが出て、まさに未災者が未災者に伝えるということをしているんですが、1つ私自身も興味を持ったのが、出前講座を準備するときに気をつけていることとか、依頼があって恐らく行くことになると思うんですけど、私自身も幾つか学校で出前講座をさせてもらう機会があったりするんですが、やっぱりすごく準備に時間をかけると思うんです。準備の中で自分たちが特に気をつけていることとか、プログラムの中でこういったことを入れようとか、そういったことで考えたことがあれば、ほかのチームの方も恐らく今後、小学校、中学校での出前講座というのが、今後我々もやってもらいたいなと思っていることなんで、ぜひその辺の準備のときの工夫とかを教えてくださいなと思いますが、今度は逆回りで、県立大さんのほうから。

- 田中さん 出前講座で気をつけていることは、対象が小学生ということなので、自分たちの知識をそのまま

伝えるのではちょっと難しいかなって感じて、あと自分たちの企画で、ツアーで学んだことをリンクさせて伝えるということだったんですけど、それも小学生向けに分かりやすくする、例えば漢字に読み仮名を振ったりとか、難しい言葉を使わないとかっていうことは気をつけてやっていました。

- 本塚コーディネーター ありがとうございます。

では、山森さん、どうでしょうか。

- 山森さん 防災授業をつくる上で特に気をつけているというふうな話だったと思うんですけど、皆さんが小学生のときって防災授業とかありましたか。僕の小学校のときはあったんですけど、どんなものだったかという、防災について、僕のときは阪神・淡路大震災とか、津波も教えてもらったんです。怖いビデオを見て、怖いなと思った後に、全校集会で校長先生がありがたい話をしていただく流れだったんです。僕はその当時から防災について興味があったんです。昔住んでいたところが東灘区だったので、親から「ここは阪神・淡路大震災でこういう被害があったんだよ」という話を聞いていたので、興味自体はあったんですが、その防災授業自体は、正直つまらんなと思っていました。怖いビデオを見て先生の話聞く、その一連の流れがいつもパターン化されているし、行かんでも分かる、そんなの知ってると思ってたんです。

自分が今明石高専のD-PRO135°という防災授業をつくっていく立場になるに当たって一番気をつけているのは、生徒が受け身にならない授業をつくるということが一番大切かなと思っています。例えば、私たちD-PRO135°の特徴でもある防災ゲームを活用した生徒自身に考えてもらうゲーム、また、講義の中でもただただ講義としてつらつらしゃべるのではなく、生徒たちに意見を伺って、その意見をみんなで議論しながら進めていくというために、生徒たちも災害時に実際に動くリーダーになってほしいという考えももちろんあるので、一種のデモンストレーションを授



業でやっていけるようになったらいいのかなと思いがらつくっています。

○本塚コーディネーター ありがとうございます。

堀さん、どうでしょう。

○堀さん あまり実は授業とかをしたことがなくて、ゲームは出しているのですが、そっちの話になるんですけど、ゲームを出すに当たって、習ってない漢字とかが小学校はあるので、それを使わないようにしたり、小学校よりも小さい子対象で幼稚園とか向けなんですけど、エプロンシアターをやったりするときは、さっきおっしゃってたんですけど、難しい言葉を使わないようにしたりだったりとか、ただ話を聞くだけじゃ飽きちゃうと思うので、小学校とかでもそうだと思うんですけど、ずっと話聞いてたら多分寝ちゃうので、どこ行ってもそうなんですけど。ずっと話聞いているだけだと飽きちゃうので、うちのゲームだったら一緒に解決案を出し合ったりであったりとか、意見を聞いてこっちが返して、また会話を広げてみたい、ただ話だけじゃなくて会話とか、どっちかという話しかけて返ってくるみたいな、そういうのを気をつけてやるようにはしています。

○本塚コーディネーター なるほど、ありがとうございます。

林田さんのほうから何か聞きたいことはあります。

○林田コーディネーター 皆さんの1年間の発表を見せていただいて、すごいなとずっと思っていました。ちょっと大まかなことかもしれないですけど、皆さんがされていることって、人と関わって、それを自分たちでまずはインプットして、つくるという形を自分たちで考えながら、それを皆さんに伝えていく、アウトプットしていくということをされているのかなと思いました。私もそんなに小学生の皆さんとか、地域の方々に関わるということにはしていないので、そういうことをされている皆さんというのは、すごいことだなと思いました。

人と関わって自分たちで考えて伝えていくということは、皆さんどうことが大事だなと思ってらっしゃるのかなということを知りたいなと思いました。

○堀さん 人とつながるに当たって一番大事なのは、やっぱり楽しいことだと思います。別に無理して会話を広げようとかそういう楽しさじゃなくても、一緒にゲームをやったら会話も自然と生まれるし、私たちのチームがボケを1つ返したり、みんな関西人なんで、「いやいや、それはないやろ」みたいな、盛り上がった

りであったりとか、防災で行っているの、例えば「防災に関してこういうことあったらいいんですけど、知ってますか」みたいな語り合いとか、そういう会話が大事であったりとか、一番優先されるのは楽しいことだなと思います。

○本塚コーディネーター ありがとうございます。

奥田さん、どうでしょう。

○奥田さん 僕が一番大事なと思うのは、相手は小学生の方もいれば、高齢者の方を相手に防災の講座とかをやることもよくあるんですけども、一番大事なのは自分たちが当たり前だと思わないことです。自分たちの常識が通用しないことがよくあるということを前提にして、いろいろ話したり、接していかないといけないなということだと思います。

例えば、最近小学1年生と防災の講座でグループと一緒に活動する機会があったんですけども、おおっと思ったのは、和式便所という言葉が通じなかったんです。「和式便所、洋式便所あるよね」って言っても、洋式便所って何、和式便所って何っていうことを聞かれて、ちょうどやってたゲームのパプニングのカードに和式便所がどうこうって書いてたので、和式便所という言葉が分からないとそのミッションは絶対にクリアできないんですね。そこは想定外だったので、自分の常識をもう一回見直さないといけないなということだったりとか、あとは、ふだんの中学校とかの防災授業で使っているスライドを、ほぼ同じものを高齢者の方、デイサービスの授業で使わせていただいたときにも、走って逃げるとい言葉が入っていたんですけども、「私ら走られへん」というふうに言われて、確かについていうふうになりまして、本当に小さい言葉一つ一つでも、自分たちの常識が必ずしも通用するわけじゃないということは、一番頭に入れておかないといけないかなというふうに思いました。

○本塚コーディネーター ありがとうございます。



山森さん、どうでしょう。

○山森さん 僕が言いたかったことを全部奥田君が言ってしまったのですが、僕が人と関わる上で個人的に大切にしていることについて話すんですけど、一番大切になって思うのは、相互のコミュニケーションだと思うんですね。イベントってどうしてもこちらが主催するので、自分たちがどうしたいかということばかりに重点を置いてやってしまうと思うんですけど、相手からすると、先ほど奥田君の話にもあったように、高齢者と小学生とかでは全然考え方も違う、立場も違う。それって相手の立場に立って考えてみないと分からないことで、避難所運営とかでも相手の立場に立って考えるって非常に重要なことだと思うんです。その実践を僕自身、このD-PRO135°での活動を通じて、体験できているのではないかなと思います。

○本塚コーディネーター ありがとうございます。

次、クロ社研さん、どうぞ。

○為乗さん 自分の場合は、特に高齢者を相手にお話をするときなんですけど、人ごととは絶対に思わないということで、でもやっぱり僕らは未災で、阪神・淡路大震災を受けてなかったり、こっこの地域の人は東日本大震災も実際に体験はしていないんですけど、それでもやっぱり情報やニュースとかマスコミで知ることにはあるので、そのときに一方的な感情だけじゃなくて、当時実際に被災した人の気持ちを完全に理解してあげられなくても、察してあげることとかもできるし、話されることももしかしたらつらいと思う人もいるかもしれないので、深く聞くのもいいんですけど、うまくやるといいますか、相手に歩調を合わせるような感じで、あまり相手につらい思いをさせないように寄り添うのがコミュニケーションにも関わってくるのかなって思います。

○本塚コーディネーター ありがとうございます。

では、県立大の田中さん。

○田中さん 私が人と関わる上で大事だなというのは、被災者と関わるということ準備してきたので、やっぱり信頼関係というか、いろいろ聞いていく中で、さっき話あったように、つらいこととか大変だったことを聞き出すというのは難しいかなと思って、それが大事かなと思いました。

○本塚コーディネーター ありがとうございます。

キーワードとして1つ出てきたのは、予想外というのはあって、その予想って、私なんか教育していると、学生を見ると、予想外のことが起こるといえるのはすごく不安だとか、それが怖いと思う学生とか生徒も多

いと思うんですけど、逆にそれが楽しいとか、予想外で出てきたことが今すごく印象深くエピソードとして出てきているので、活動の中で出てきた、明石高専さんはもう言われてしまったんですけど、予想外ですごく印象に残っていることとかがあったら教えてほしいです。

例えば私、明石の某会議で出てきたのが、小学校で今子供たちが水を飲めない。水を飲んだことがないから、ペットボトルで水が保管されてても水が飲めないの、お茶にしてくださいって言われたという話を聞いて、そんなことがあるんだと思いながら、まさに常識が通用しないですね。だから、保存されている水って、ほぼ無味無臭の水じゃないですか。飲んだことがないから飲めませんって言われたって言われて、じゃあどうするんだろうと思いつつ、そんなときに阪神・淡路の教訓とか言っても、それは伝わらないだろうなというのを実感した出来事があるんです。皆さんのほうでも取組の中で、そんなこと言われるとか、こんなことがあるんだとか、そういう発見があったとか、別に自分の中での小さな驚きでいいので、そういったエピソードがあればお願いしたいんですが、誰かある方いますか。彦根東さんとか舞子さんでも、こういう予想外がありました。奥村ゼミさんとか、ほか会場のほうでも大丈夫ですけど、何かありますか。

○山森さん 予想外というか意外だったことなんですけど、どうしても僕たち、防災についてずっと勉強していると、防災についての知識の最低限のハードルってどんどん上がっていくと思うんです。どういうことかという、僕が小学校に、2年か3年ぐらいのときに初めて防災授業しに行ったんですけど、一番驚いたことは、防災について全然意識してない小学生ってすごく多いんですね。自分が想像していたより。

もう一つ驚いたことが、防災の意識を持っていない小学生と防災への意識を持っている小学生の知識の差、すごく大きいんです。防災への意識を持っている小学生の知識、例えば持っていない人をゼロだとすると、僕の考え方ですけど、1じゃなくて10か20ぐらいあるんです。なぜかと言うと、多分親の教育とか、家での決まり事、そういうものの積み重ねによってその差が生まれてくると思うんですけど、それを僕たちが理解していないと、やっぱりさっき言ったようにどうしても一方的な、向こうのことを理解していない授業ができてしまう。これが僕の一番意外だったこと、驚きです。

○本塚コーディネーター ありがとうございます。なか

なか難しい話のトップバッターで、貴重な経験をありがとう。

ほかいかがでしょうか。クロ社研さん、インタビューとか、今回調査していただきましたけど、参議院選で候補者、実は2名しか上げてなかったとか、あとは自分たちの学生のアンケートをとっても意外と防災が伸び悩んだという結果を見て、自分たちが事前に想定したと違って逆に感じたこととか、そういったことがあれば。もしくは、インタビューした人たちからこういう言葉をもらったとかがあれば、お願いします。

○**為乗さん** 防災って入れたほうがいいと思う人はいてくても、最優先に考えてはくなくて、どうしても政治とか現代社会とかになると、難しい法律とか外交関係だったり、難しい、とにかくすごく難しいよく分からない政治関係のところを求めている人は多いんですけど、でも、防災って僕らがやれば何とか、完璧に防げなくても何とか抑えることができるわけなので。でもそれを政治の人が発信してくれるんだしたら、その人を支持している人の心に少し届いてくれるんじゃないかなというも思いますし、やっぱり防災を掲げている人って、福島県のほうは原発事故があったので掲げている人もいたんですけど、逆に僕の地元栃木県では全くなくて、むしろやっぱり、特に多かったのは、コロナウイルスがここ数年ずっとはやっているんで、コロナウイルスに対しての対策とかを頑張りますというふうなことを公約に掲げている人がすごくたくさんいたんです。コロナウイルスの対策というのと、マスク、うがい手洗いとかが主になってしまうので、インフルエンザのようになかなか消えることのない人災なのかなと思うんですけど、災害って一度起きると結構大きな被害になったり、外傷、けがをしてしまったりする可能性もありますし、津波とかも発生してしまう場合もあるんで、そこに対して一番大切なものって、未災の人たちが学んでもらわないと。防災やりたいって人はなかなか栃木県にもいなくて、被害が直接なくて、海も全然なくて、火事は起こるんですけど津波とかもないので、未災のところこれから先、防災にもっと前向きになってくれるかなというのが課題だと思います。

○**本塚コーディネーター** ありがとうございます。

準備できましたか。堀さん、お願いいたします。

○**堀さん** 知識面に関して、自分たちが思っている以上に知らない人がいて、逆にめちゃくちゃ知っている人とかもいて、うちのチームだったら地域の高齢者の人

とかにイベントをやることが多いんですけど、うちが出しているゲームで、カードに避難するときに必要なものを書いているやつがあるんですけど、それに毛布とかいろいろ書いてあるんですけど、避難した先が公民館とかやったら毛布とかいっぱいあるよねとか、自分たちが知らないような話をたくさんして下さったりとか。活動に関してのすごい予想外じゃないんですけど、ちょっと前にあったメモリアルアクション KOBE のやつでゲームの感想とかをお聞きしたときに、うちの活動がゲームをつくる側じゃなくて、ファシリテーターとかを育てる側にしたらどうかみたいな意見とかもあって、そういう別の角度の意見とかがあると、すごい予想外だし、励みになるというか、いろいろなことをもっていきこうと思ったりとか、活動に全然関係ない予想外で言うと、地域でやっている知り合いとかに出くわすときが多くて。1回あったのが、私の親戚が来たことがあって、あと小学校の頃の先生がいたとか、教頭先生がいたみたいな、そういうのは世間狭いなと思ったりとか、予想外やなって思います。

○**本塚コーディネーター** ちなみに知事が来たときには、あのときは現場にはいたんですか。

○**堀さん** いました。最初に思ったのは、知事と写真撮ろうと思いました。写真を撮りました。

○**本塚コーディネーター** 並んで。

○**堀さん** 並んで撮りました。隣に立って、写真を撮りました。

○**本塚コーディネーター** なるほど、そういう出会いもあると。

○**堀さん** そういう出会いもあります。

○**本塚コーディネーター** ありがとうございます。

県立大はどうでしょうか。

○**田中さん** 語り継ぎツアーで、なぎさ地区というところで聞き取りとかいろいろしていたんですけど、なぎさ地区って被災された方が結構集まって、すごい防災意識が高いのかなと思ってたら、全然備蓄とかやってませんみたいなこともあって、それはそれでいいのかなと思ったり、あとは小学校の出前講座では、意外と小学生が共助とかいろいろな言葉を知ってて、すごい出前講座がやりやすかったという記憶があります。

○**本塚コーディネーター** 逆に子供のほうがやりやすい。高齢者、いわゆる被災経験のある人と、被災経験のない子供とかにやるっていう2つの局面が出てきますけど、実際に皆さんの活動で出前講座だったりとかアンケートをやったりするときに、ぶっちゃけると



どっちを対象にしたい。どっちのほうが自分たちとしてはやりたい。じゃあ、高齢者、被災経験のある人向けに何かしたい。ぜひ会場の舞子高校さんもそうですが、自分たちの活動を伝えるとしたら、被災経験のある人に伝えたいという方、挙手をお願いいたします。1人。逆に、経験のない人に伝えたいという方。ありがとうございます。もう1回聞きましょうか。被災経験のある人に自分たちが学んだこととか、自分たちのつくったものを体験してもらいたいという方。3票。ありがとうございます。逆に、被災経験のない方に伝えたいとか、そういう人向けにやっていきたい。ありがとうございます。

では、代表して、まずは堀さんから行きます。なぜそう思われたのか。

○堀さん 個人的な話にはなるんですけど、私はあまり子供が得意ではないので高齢者がいいなということと、あと、まだ子供向けのゲームがそんなに多くないので、高齢者向けのゲームが多いので、そっちのほうが個人的にはやりやすかったり、反応がちょっと、個人的には、何言っても返してくれるのは高齢者の方かなというのがあるので、どちらかと言えば高齢者の方のほうがやりやすいんですけど、個人的な意見なので、チーム全体が同じとは分らないです。

○本塚コーディネーター ありがとうございます。

山森さん、どうでしょう。ぶっちゃけで大丈夫です。

○山森さん まず1つは、単純に僕たちがふだん開催しているイベントが小中学生向けなので、高齢者の話を聞くことももちろんあるんですが、高齢者の方々とか被災者向けに、そこに焦点を当ててイベントをやるという機会がそもそも少ないということがあるのと、あと個人的な考えになるんですけど、未災者から未災者に伝えるという今回のテーマでもあったような気がするんですけど、私たち未災者でも、僕たちって防災について勉強しているわけじゃないですか。だから、ほかの未災者より自分たちのほうが何となく上だって

思っちゃうときがあると思うんです。ちょっと言い方が悪いかもしれない。何て言えばいいのかな、ほかの人とは違うぞみたいな、思っている人いません。やっぱり落とし穴かなと思っていて、でも、どこまで行っても僕たちって未災者なんです。幾ら知識を持っていたとしても、絶対に災害を経験した人のほうが実際に肌で感じているわけですから、そこに絶対的な差があると僕は思っていて、その絶対的な差がある未災者のほうが未災者の人々につくったゲームというのを実際に被災した人がどう認識するのか、実際に効果的かどうか、不快だとか、実際に思われる方もいらっしゃると思うんです。そういう意見をもっともっと、うちのD-PRO135°もそうですけど、聞き入れて取り入れていくべきなのかなとは思っています。

○本塚コーディネーター ありがとうございます。

では、県立大から行きましょうか。

○田中さん 高齢者でも子供でもいいんですけど、ぶっちゃけやりたくないで言うと、自分たちのような大学生はやりたくないです。やりにくい。大事なことなんですけど、被災経験のあるなしで言えば、ない人に防災教育とかをやっていきたいなというふうに思って、自分自身が未災者で、未災者って防災に興味を持っている人とか少ない気がして、自分もそうやったんですけど、そういう人に向けてやっていくのが大事かなと思っています。

○本塚コーディネーター ありがとうございます。

では、クロ社研、お願いします。

○為乗さん 歴史は繰り返されます。ですので、語り継がれていく、語り継がなきゃならないものが災害のことなんです。阪神・淡路大震災で家を強くしたと言われても、東日本大震災で流された。ここでまた新しく津波という知識を我々は得られたわけなので、それを高齢者に伝えるのももちろん大事なんですけど、年下の子に言っていけないと、また日本がああなると本当に危ない状態になってしまうので、昔の歴史とかは確かな情報じゃなかったりする、歴史だって変わったりするニュースとかも見たりします。でも、僕らはまだ感じたり勉強することとか、世の中が今便利になってきているので、スマホで検索したらすぐに情報が手に入れられるので、そこで得た情報とか、被災者から実際に聞いた情報を下にどんどん流していくことによって、その連鎖というか、語り継ぎがとても大事だと思うので、私は高齢者よりも子供に向けて、簡単に危険性を伝えていくかというのがすごく大事だと思います。

○本塚コーディネーター ありがとうございます。私も非常に同感だと、歴史は繰り返しますよね。力強い言葉ありがとうございます。

奥田さん、どうぞ。

○奥田さん 僕は子供に対して授業をするのが好きなんですけれども、一応、僕は両方とも授業をしたことがあるんです。高齢者の方にデイサービスで授業をしたときに一番おあって感じたのが、やはり体力の面だったり、デイサービスなのでいつも同じような日々を送っているからなのかなと思うんですけども。無気力やなっているふうに感じちゃうんですよね。例えばゲームをするにしても、子供も最初はやる気のない子供もいるんですけれども。魅力を伝えるだとか、とりあえず1回やってみようとか、やってたらだんだん乗りに乗ってきて、最終的には楽しんでもらえるんです。最初のとりあえずやってみようかにも応じてもらえない人だったり、一応ヘルパーさんがいるんで何とかゲームを進めていくんですけども、サイコロを振るとか、駒を動かすのも全部ヘルパーさんがやっていて、どうしてもこちらは楽しんでもらおうと思ってるやるんですけども、どれも効かなかったんです。

どれも効かなかった人が数人いたというのと、あと、やはり被災された経験者なので、自分のされた経験のお話を聞く機会もあるんですけども、自分が前で防災の講座をした後に、いわゆる被災者にしか答えられないような、むちゃくちゃ難しい質問だったり、専門的な質問が飛んできたときにどうしても答えられないときがあって、何も知らんやんみたいな顔をされる。前でしゃべる身としては心にぐさっと来るところがあるので、それよりは楽しむを第一に、おもしろいことを言ったらとりあえず盛り上がり、最後は楽しかったで終わる子供たちのほうが、まだ純粋な面もあるので、すごい授業はしやすいかなと思いました。すみません、ぶっちゃけました。



○本塚コーディネーター ありがとうございます。ぶっちゃけていただいたほうが我々も、なるほど、そういう思いでやっているのかというのがすごく伝わりました。

ぶっちゃけついでに、今日ここの中に開発者はいないんですけど、矢守先生たちが中心につくったクロスロードゲームを扱われているチームが幾つかあったんですが、今日ほかのチームの活動の報告を聞いたり、今回は中間報告会とかキックオフ会で体験してもらったりした中で、こういうのを次自分たちも使ってみようとか、ここのあれはすごいなという、感激したものがあればぜひ教えてもらいたいのと、それについて開発者なり、それを実施している人にもうちょっと教えてほしいことがあれば、聞きたいです。

会場のほうからもぜひお聞きしたいんですけど、私はクロ社研の政治と防災を結びつけたというアイデアはすごいなと思って、いろいろなところで講義をさせてもらうんですけど、地域の代表者の人とか、もう明日災害が起こるかもしれないし、命に関わるのが一番大事ですって言う割に、確かに選挙のときそうだよなって、すごい腑に落ちて、あの人たちにちゃんとこの結果を見せてあげたいなと思ったぐらいなんですけど、あれって発想はどこから来たんですか。すごいなと思ったんですけど、どこからその発想が出てきたのかと、今後それをどう使っていくのかなと、もし何かもろみがあれば教えていただきたいんですけど、いかがでしょうか。

○神戸学院大学クローズアップ社会研究会 私もクロ社研に入ったのは、今大学2年生なんですけど、2年生からなんです。防災と選挙に結びつけたのが、もともと私たちで兵庫県知事選挙を取材しておりまして、その中で、最初はそもそも選挙というものに対して私たちがよく分からないなというところから始まったんですけども、取材していく中でどういうことを公約に入れているのかなという、選挙自体をまずは分析をしていったんです。その中で、昨年度、顧問の安富先生からメモリアルアクション KOBÉ に出ないかというお話をいただきまして、この災害メモリアルアクション KOBÉ は防災、災害に関しての発表ということで、私たちの今やっている選挙というやつとメモアクの防災というのをくくりつけて、選挙×防災でやったらどんな結果が出るだろうかというのを調べていったのが発端なので、メモアクのおかげかなと思っております。

○本塚コーディネーター ありがとうございます。せっかくなので、ほかのチームで一番興味を持っていると

ころがあれば、ぜひ。このまま順番で流していきたい  
と思いますので、ご指名していただければと思います。

○神戸学院大学クローズアップ社会研究会 どのゲーム  
がというよりかは、D-PRO135°さんのゲーム班の企画  
力だったり発想力、そういう目線からゲームをつ  
くっていくんだというところのアイデア力というの  
は、すごいなというふうに個人的に感じております。

○本塚コーディネーター では、ゲームの企画力、発想  
というのはどこから出てくるのかを、ゲーム班の奥田  
さん、よろしくお願いします。

○奥田さん ありがとうございます。ゲームは、皆さん  
想像してもらいたいんですけども、防災ゲームって  
いろいろあると思うんですけども、割合としては地震系  
のゲームが断トツで多いんじゃないかなと思うん  
です。なので、風水害ゲームをつくったり、あまり注目  
されてないほうに隙がないかなみたいなを見つつ、  
あとはいろいろ活動をしていく上で、こんなゲーム欲  
しいなみたいなのがよく意見で寄せられるんですけ  
ど、それと合わせてつくる感じですね。ボツになる案  
はいっぱいあるとは思いますが、隙を見てという  
のと、あとは本塚先生の研究室にボードゲームがたく  
さん置いてあります。

○本塚コーディネーター 直近で、ボツになって、自分  
の中でこれは復活させたいなって思うものがあれば教  
えていただければ。ほかの人にとられない程度で大丈  
夫です。

○奥田さん 一応、僕がつくったゲームは全部完成させ  
ているんですけども、僕の1つ上の代の方がつくった  
ゲームが途中で止まっちゃったので、最後まで完成し  
てほしかったなという思いはあります。

○本塚コーディネーター ありがとうございます。

では、奥田さんが注目している、もしくは今回これ  
聞いてみたいなのというところがあれば、名指しで。会  
場側でも大丈夫です。

○奥田さん 体験版の「あにまるず」なんですけど、僕  
たちがつくっているゲームは基本ボードゲームなの  
で、机の中で終わっちゃうので、やっぱり体を動かした  
ほうが楽しそうやし、自分たちも小学校の低学年の  
方とかに防災ゲームの体験会をするときに、退屈する  
んですよね。でも、体を動かしたら退屈しないと思う  
んです。なので、そろそろD-PROも何か、体を動か  
す新しいゲームとか、別の形態のゲームにしてい  
きたいなって考えているんですけど、なかなかでき  
ないです。なので、体を動かすゲームを防災で取り  
入れたというのはすごいことだなと思います。



○本塚コーディネーター そのあたりどうでしょうか、  
堀さん。

○堀さん ありがとうございます。体験版の「あにまる  
ず」なんですけど、やっぱり体を動かしたら、やった  
という感じがすごいするじゃないですか。ただ見て手  
だけ動かすより、体を動かしたらちょっと疲れたりと  
かして、今日これやったわみたいな、体にも実感がつ  
いたりとかすると思うんです。

あと、体験版の「あにまるず」は結構小物がいろ  
いろあって、避難グッズに。今はやりのゲーム機とか  
あったり、家族写真みたいなのもあって、こんな  
あるんやみたいな。小物でちょっと「ふふ」って思  
ってもらったりとかするので、その小物とかも全部手  
づくりであったりとかでやっているの。褒めてくださ  
ってありがとうございます。

○本塚コーディネーター では、堀さんが聞いてみたい、  
あのものは奪いたいとか、参考にしたいというのが  
あれば。

○堀さん 同じところを褒めてしまって申し訳ないん  
ですけど、D-PROさんの、名前は忘れちゃったん  
ですけども、解決するやつあるじゃないですか。

○本塚コーディネーター 「TRY！」かな。

○堀さん あれめっちゃおもしろくて、前やったとき  
おもしろ過ぎて、改善案みたいなのを書くん  
ですけど、いっぱいになるまでめっちゃ書いて、「こ  
こはこうしたら？」みたいな事を言まくって相手  
を困らせてしましまして。あれだけおもしろい  
ゲームだと、余計にめっちゃおもしろくしてほ  
しいってなるし、今まであまりない形のゲーム  
だからこそもっと前面にプッシュしてほしいし、  
めっちゃ完成させてほしいという気持ちが強  
くて、私があれば遊びたいという気持ち  
がすごい強いんですよ。それをすごい楽しみに  
していて、あれはD-PROさんだからこそ  
できるんだろうなと思うし、うちだったら  
多分出ない意見なので、すごい  
いいなって思いました。奪いたいとは別  
なんですけ

ど、よかったら一緒に、体験会とか呼んでほしいなと思います。

- 本塚コーディネーター** 開発者の大坪さん、どうでしょう。
- 大坪さん** 褒めていただきありがとうございます。
- 本塚コーディネーター** みんな褒めなれてないから緊張するんやね。
- 大坪さん** 体験会はぜひ、次年度も引き続き改良を進めていく予定なので、日程さえ合えばぜひ参加していただければと思います。
- 本塚コーディネーター** ここの班のこれを聞いてみたいというのがあれば。
- 大坪さん** 県立大学さんの、「ぼうさいこくたい」のときにいろいろツアーをされていたと思うんですけど、ほかの地域でやる予定と違ってあるんですか。
- 田中さん** ゼミのプロジェクトが1年単位で変わっていくということもあって、今年はもうなくて、来年も未定というところです。
- 本塚コーディネーター** 個人的にとか、ゼミではなく別途自分たち、せっかくやってみて、反省会もして、こういうのもしたかったなというのを次につなげるとか、そういった企画はないの。
- 田中さん** そういう話は出てないですね。
- 本塚コーディネーター** ありがとうございます。じゃあ、逆に気になったとか、ここの裏話もうちょっと聞きたいかがあればお願いします。
- 田中さん** 皆さんの発表を聞いていて思ったのは、ゲームとか新聞とか、いろいろな切り口で防災を発信されているなと思いました。自分たちはツアーという形で伝えるという活動をしてきたんですけど、新聞とかで発信されているところもあって、そういうテキストとかで伝えていくこだわりとか強みというのは、どういうところにあるのかというのを聞いてみたいと思いました。
- 本塚コーディネーター** では、彦根東さんでいいですかね。彦根東さんで、誰か我こそはという方。誰でも大丈夫そうです。
- 彦根東高等学校1** 新聞としては、こっちの宇田さんのほうが絶対に詳しいんですけど、私たちは同世代の高校生に向けて伝えるというスクールメディアとしての役割があるので、私たちと同じ目線かは分かりませんが、私たちが知りたいなということをお届けできるように、私たち目線で書いて、ほかにもレイアウトとか構成とかいろいろこだわりはあるんですけど、まず自分たちのしたいことをきちんとブラッシュアッ



プして、ちゃんと自分たちで取り組むということをやっています。

- 本塚コーディネーター** ぜひこの機会にほかのチームの取材をしていただければと思いますが。
- 彦根東高等学校2** 明石高専さんのゲームは去年、取材というか、プレイさせていただいて、あとズームでも取材はさせていただいたんです。どのチームもすごい気になるんですけど、中間報告会の際にすごい楽しいなと思ったのは TEAM-3A さんで、体験型が本当にやってみたいなという、小学校とかでやっても絶対将来も覚えてるやろうなって思って、すごいなって思いました。
- 堀さん** ありがとうございます。
- 本塚コーディネーター** 林田さん、どうですか。このチーム、つくっているのがすごい驚いたとか、ここがよかったかがあれば。
- 林田コーディネーター** 私は、前回の中間発表会、すごく楽しく参加させていただきました。こっこのところは今は言わないでおこうと思うんですけど、ぜひ皆さんに聞いてみたいことがあって、今お話を聞いていたら、皆さんが今まで受けてこられた防災教育というのが割と受け身の防災教育だったのかなと。それを自分たちで受けていける中で、何か自分たちの中で思われることがあって、今自分たちが活動していくこと、伝えていくっていうことを今模索されていると思うんですけども、1つは楽しいということが重要だと。自分で届けるように、考えていけるようにということも大事なのかなと思いました。皆さんは、皆さんがつくられたゲームであったり、新聞であったり、そういうものを体験していただいた方にこうしてほしいとか、そういう思いというものはあるんでしょうか。
- 本塚コーディネーター** 誰から行きましょう。じゃあ、堀さん。
- 堀さん** あまりこうあってほしいみたいなのは、今ま

ではあまり思っていないんですけど、強いて言うとしたら、震災があったとしても、自分たちがゲームとかしたことによって得た知識を生かしてほしいなとは思いますが。

あと、やっぱり楽しかったらそれだけ友達とかに話したり、小さい子だったら家に帰ってお母さんに話したりとかっていうのがあると思うので、楽しい思いがみんなに広がっていったらいいなというふうには思っています。

○本塚コーディネーター ありがとうございます。

奥田さん、どうでしょう。

○奥田さん 僕たちが活動、ゲームを通して、防災に興味がない人に防災に興味を持ってもらえるきっかけづくりというのを一番に活動をしています。例えば、防災のゲームじゃなくて、普通にこちらが話す授業の機会であっても、必ず四、五人のグループで話し合う機会がありますし、それぞれのグループにD-PROの部員が補助みたいな感じで入って行って、これはこれでこうなんだよみたいなことを言って、それについてまた話し合ってもらいたいな感じで、お互いが話し合うことによって、この授業でこう言っているというのはこういうことなんやなっていうふうに、ちゃんと自分たちがそれぞれのレベルでかみ砕いて理解できるというところまでを目指して授業をしているので、そこをきっかけにして、ふだんは防災に興味がない人であっても、その授業が終わった後に少しは興味が、頭の片隅にでもいいから防災という言葉ぐらいは入れたいな感じのことを目指しているの、きっかけづくりというのはすごい大事にしています。

○本塚コーディネーター ありがとうございます。

山森さん、どうでしょう。

○山森さん いつも言いたいことを言ってくれる優秀な同年代で、すごく頼もしく思っているんですけども、私たちがきっかけづくりをする理由というか、地域班の観点から言わせてもらうと、僕が大切にしていきたいというか、防災をやっていく上で非常に重要だと思っているのは、災害に強いまちづくり、地域づくりだと思えます。

その地域づくりをしていくために、僕はとても印象に残っているエピソードがあって、東日本大震災のときに小中学生の呼びかけによってまちの皆さんが避難したという話はすごく有名だと思うんですけど、逆に驚いたんですよ。この話、有名になるぐらい特別なことなんだと思ったんです。当たり前じゃなかったんだという衝撃を受けたんですけど、それを当たり前

していけるような活動をしていきたいです。さっき奥田君が言ってくれたみたいなきっかけづくりによって、ゆくゆくは、理想なんですけど、授業を受けた一人一人が災害時に自発的に動けるようなリーダーになってほしいという理想形はあります。そのために私たちは、地域を重点的に、そのきっかけづくりを一人一人にしていきたいという思いがあります。

○本塚コーディネーター ありがとうございます。

続きまして、クロ社研さん、どうでしょう。

○為乗さん どうなっしてほしいかという、1つでも知識として持ち帰ってほしいなというのは思ってて、先ほどD-PROさんが言ってくださったんですけど、やっぱり率先してほしいというのがありますし、ほかの人にそれを伝えてほしいとまでは言わないですけど、初めての防災教育、例えば避難訓練とかだったら何回もやってて、数学の勉強だったら数学の公式をずっと言ったら覚えるみたいな感じで、反復がとてども大事だと思うんです。やっぱり防災教育って普通の科目とかには入ってないので、反復ができない科目なので、TEAM-3Aさんみたいな体を使ったほうが覚えるというのもすごく納得しましたし、それで何かを持ち帰れる、自分の身をやっぱり一番守ってほしいと思うので。油断している人間はすぐ死んでしまうので、どんなに安全な災害がない場所でも、災害がある場所でも、危機感を持ってほしいなというのはあります。そういう日本になってくれたらなと思うので、自分の身を自分で守るということ、危機感をしっかり持ってもらうことが最終目標であり、それを持ち帰ってほしいなと思います。

○本塚コーディネーター ありがとうございます。

県立大学さん、どうでしょう。

○田中さん 話したいことが結構出てしまったんですけど、自分たちの活動を通じて、きっかけづくり、災害に備えて自分の身を守るような行動をとってもらったり、理想は、地域に入って防災に取り組んでもらったりというのが理想かなと思っています。

あとは、そういう活動を通じて仲間をつくって、防災を1人でやっていくというのは難しいことだと思うので、そういう人とのつながりとかもつくってほしいなと思っています。

○本塚コーディネーター ありがとうございます。

会場のほうから、ぜひこの機会に壇上のメンバーのほうに聞いてみたいことがありましたら質問のほうをお受けしたいと思いますが、我こそはという方、こんな当て方をすると難しいですか。この機会に聞いてお

きたいなということがありましたら、ぜひ。

奥村先生、どうぞ。

○**奥村委員** 関西大学の奥村です。

皆さんの活動って非常にユニークで、どういうふうに関心のない人たちを巻き込むかということで、試行錯誤されている様子がそれぞれの立場から共有されて、すごくよかったなと思って聞いていました。

突然私たちの命の奪う問題って、別に災害だけじゃないですよ。交通事故であったり、感染症であったり、紛争であったり、いろいろな問題があると思うんですけど、皆さんのようなゲームみたいなものを使ってみたり、皆さん独自に記事をつくってみたり、こうやって若い世代が試行錯誤して、関心のない人たちも巻き込んで、ちょっとでも関心を持ってもらえるように試行錯誤している分野って、災害以外にないんじゃないですか。交通事故なんてこんなに身近だし、未災者ばかりですけど、ゲームで交通事故対策のことを一生懸命考えようって一生懸命になっている高校生、大学生、私見たことないです。コロナ対策でもそうです。紛争対策もそう。

そう思うと、皆さんの活動ってすごく可能性があって、こういう活動をすることがどんな結果をもたらすのか、10年後、20年後というのはすごく楽しみだなと思って、期待したいなと思っているんですけど、他方で、やっていてよく分かると思うんですけど、若い世代は真っ白でしょ。真っ白だから、比較的熱心な人間に育てることも可能だと思うんですけど、私ぐらい年行くと、もうそんな考えどころ変わらないんです。関心のない人間はもう関心ないし、対策やらない人はやらないんです。なかなか変わらないからゲームでいろいろやっても、すごいねって言ってくれても、なかなかその人たちは、行動を変えない。結果的に褒めてくれるけど。

だから、そこはいろいろ限界があると思うんですけど、でもそんな限界の中にも、結構上の世代でも4割ぐらいは、意識はあるけど行動に移せないとか、そもそも防災とかいいと思っている人たちが4割ぐらいいるんだけど。そこに一生懸命アプローチするのはしんどいけど、ある程度関心のある人たちに対して、皆さんのゲームとか記事とかが届いて、より一層いい活動にしてもらって、世の中の常識、当たり前を変えていくきっかけはつくれるのかなと思うし、残り4割のなかなか行動が変わらないような人たちに対しても、何か可能性のある活動になっていけばいいなと思って見ていました。

何か質問してくれということだったんですけど、コメントになっているんですけど、さっき若い世代か上の世代か、どっちにアプローチするのが好きですかみたいな話があったと思うんです。人ってなかなか行動変わらへんよなっていうそのあたりの感覚って、やっぱり皆さん自身感じてらっしゃるんじゃないかなと思うんですけど、若い子たちというか、小学生とかだったら結構素直でしょ。そのあたりって皆さんどう受けとめてらっしゃるのかなということ、改めて聞きたいなと思ったのと、それが答えづらかったら、何を伝えることが大事か、もう二十何年前の阪神・淡路大震災って皆さん生まれる前の出来事でしょ。ゲームを通してとか新聞記事を通して、28年前のことってどれぐらい重視されているのかなというのもちょうと気になったんですよ。どっちかでもいいです。何か答えられたら教えてください。

○**本塚コーディネーター** ありがとうございます。

では、難しいかなと思いますが、県立大さんのほうから。

○**田中さん** 何を伝えたらいいかみたいなことでいいですか。やっぱり震災、自然災害の怖さとかは当然そうですし、自分が活動していて思ったのは、被災した人の気持ちとかつらかったこととかは、それを聞いた人って、人は感情を持っている動物なので、それが心に響いて防災に興味を持ってくれたり、同情というか、寄り添う気持ちができたり、自分自身が防災に取り組みきっかけになるのかなと思いました。

○**本塚コーディネーター** ありがとうございます。

クロ社研さん、お願いします。

○**為乗さん** やっぱり自らが体験していないと体が覚えなれないというのはあると思うんですけど、阪神・淡路大震災とか東日本大震災を伝えるというのも大事なんですけど、それを少し大きくして、先ほど言ってくださった災害とか、身近にある災害や、結構日本って地震大国なので、必ずしも大地震に遭わないで人生終わる人もいるんですけど、小さい地震とかなら普通に経験はすると思うので、その地震が大きくなったらどうなるとか、初期段階を小さい子には覚えてもらって、その後大災害に発展してしまったり、地震が起きて津波は起きるので、まずは津波というよりも地震というところから、難しい話ではなく、どういうことが起きたらどうなるよとか、その人目線で言うと、年齢の低い方は素直に受け止めてくださって、年齢の高い方って、例え頑固でも経験はすごくあると思うので、その経験でもし昔の知識で間違っているところがあったりした

ら、それをゆっくりと新しい常識に変えていければなというふうに思っています。

○**本塚コーディネーター** ありがとうございます。山森さん、どうでしょうか。子供たちは真っ白なんですけど、どういったことを伝えたら行動に移すか。

○**山森さん** 難しい。さっきも言ったと思うんですけど、僕たちと子供たちって、いわば未災者として同じ立場でもあるんです。だから、被災者と僕たち未災者の間には壁があるというふうに言ったと思うんですけど、その壁の中で、僕たち防災について行動している未災者と被災者って僕の中では同じくくりにあるんですね。だから、防災についてあまり意識のない未災者というのは、可能性の話なんですけど、僕たち防災について勉強している未災者になることはできるんです。僕たちと同じ立場になることができるんです。それが本当はやってほしいけど、災害時に動けるリーダーというのもそうなんですけど、自分たちがお手本って言ったら偉そうなんですけど、自分たちがそういう人たちの道、自分たちの姿を次の未災者にそのまま伝えていきたいと思っています。

○**本塚コーディネーター** ありがとうございます。

奥田さん、どうでしょう。

○**奥田さん** 僕は、やはり防災に関する伝えたい知識を織り交ぜながらも、何回も皆さんも言っていたと思うんですけど、楽しい記憶にするとということがすごい大事だと思います。子供なので、例えば防災の授業をします。話し合ってくださいでやる気がなかったとしても、話し合ってくださいって言ったら一応話し合ってくれるし、話し始めてくれるのが子供のいいところで、とりあえず話すってなったら話してくれるので、あとはそこで補助にいる D-PRO の部員とかがいかに話を盛り上げられるかとか、そういうところがすごい大事ななと思います。楽しかった記憶というのは、後でお母さんにも話すし、友達にも話すし、何ならその後も記



憶にもずっと残るので、とりえず楽しい記憶にして、そこで何があったんって聞かれたときに、ちょくちょく防災の知識の話を思い出してくるみたいな感じでアプローチしていけば、子供の頭の中に自分たちが防災の授業とかを通して伝えたかった防災の知識というのは、残り続けるんじゃないかなと思います。

○**本塚コーディネーター** ありがとうございます。

では、堀さん、どうでしょう。

○**堀さん** 先生がおっしゃっていること、本当に正しいと思うんですけど、人間ってやっぱり変わらない生き物だと思うので。同じ教訓を例え何回繰り返したとしても、防災バッグを用意しない人はしないし、ふだんからこういうことに気をつけましようと言っても、気をつけない人は気をつけないと思うんですけど、子供に例えば防災教育をしたとして、家に帰って「お母さん、こういう授業を学校でしたから、こういう物を用意したほうがいいよ」って言ったとしても、お母さん側が変わらないから変わらないみたいな、防災バッグを用意しないみたいなのがあったりすると思うんですけど。じゃあどういうふうにアプローチしたらいいかと言ったら、私が思うのは、その家で用意しなくても、例えば子供が大きくなったときにホームセンターとか行って防災バッグを見たときに、昔こういう授業をしたから、今で言うと南海トラフがもうすぐあるかもしれないから、これを買ったらいいんじゃないみたいなふうに、その大人とか高齢者の人が変わらなくても、意識のどこかにあったりとかしたら、まちなかで見かけたときとか、記憶に残るようにしたら、少しずつですけど、何か変わっていくものがあるんじゃないかなというふうには思います。

○**本塚コーディネーター** ありがとうございます。

大体時間が来ましたので、最後の質問にしたいんですが、今年のテーマは「創るをシェアすると・・・」というテーマで今パネルディスカッションをしているんですが、今年このメモリアルアクション KOBÉ 2023 の活動というのは、つくったものをみんなで体験してもらって共有して、さらにブラッシュアップをみんなで経験して、お互いのチームに還元するというプロセスをみんなでつくり上げてきたと思うんです。

登壇者の皆さんにとって、メモリアルアクション KOBÉ 2023 を経験して、改めて「創るをシェアすると・・・」の後に、どういうことが自分の中で見つかったのかとか、こういうことを思ったとか、この後の「・・・」に当てはまるものがあれば、一言言っていたいで終わりにしたいと思いますが、堀さん、どうで

しょうか。

○堀さん 「創るをシェアすると・・・」なんですけど、今年はゲームすることが多かったんです。D-PROさんのゲームを今までそんなにすることがなかったんですけど、めっちゃ楽しかったの、それこそD-PROさんとは一緒にゲームをつくってみたりとかしたらおもしろいだろうと思うし、すごい厚かましいんですけど、よかったら新聞に載せていただいたりすると、チームの前進にもなりますし、今まであまりなかった防災チーム同士での横のつながりみたいなのがちょっとずつ芽生えたんじゃないかなというふうには思っているので、今年1年すごいいろいろな人と関わることができて、チームとしても、私個人としても、成長できた部分があるんじゃないかなというふうには思っています。

○本塚コーディネーター ありがとうございます。

奥田さん、どうでしょう。

○奥田さん 僕は中間報告会には参加できていないんですけども、そこでの「TRY!」のフィードバックとかを見て思うのは、やはり明石高専ってすごい変わった人が多いですね。大体分かると思うんですけども、どこかに特化して、ばーんみたいな人がほとんどなんですよね。なので、あまり普通の意見って出ないんです。なので、普通にやって感想でこう思ったとか、自分たちが欲しい課題というか、改善案というのが、この場で交流することによって得られたというのは非常に大きいと思いますし、やはり明石高専の中だけで話し合いをしてゲームをつくると、やっぱり何か変なゲームになっちゃうんです。ゲームのカードが無駄にこだわって航空券サイズになっちゃうたり、そういう飛行機マニアですね、そういうことになっちゃうので、こうやって交流することによって、自分たちではなかなか思いつかない意見というのが、新しい風みたいな感じで吹いてくるという意味で、すごいよかったなと思うので、「創るをシェアすると新しい風が吹いてくる」です。

○本塚コーディネーター 山森さん、どうでしょう。

○山森さん めっちゃきれいにまとめてくれたな。「創るをシェアすると・・・」ということなんですけど、実は明南（明石南高等学校）さん、今のTEAM-3Aさんになる前に交流させていただいたことがあって、明南さんがうちの学校に来て、僕たちも明南に行ってしまうことがあったんですけど、すごい驚きだらけだったんです。1つは、明石高専って、僕の考えというか、絶対そうなんですけど、圧倒的にインドア派が多いん

です。ゲームもそうなんですけど、全全体を動かしたくないんです。多分今から10年ぐらいたって、明南さんみたいな、実際に動いてやるみたいなのは出なかったと思います。だから、発想もしてなかったんですけど、それをお互い交流することで、自分たちも見つけられなかった視点を取り入れることができ、いわば10年分の僕たちの活動の期間が短縮されたとも考えられるんですね。

それを考えると、創るをシェアすることによって新たなつながりを僕はつくりたいと考えていて、このシェアする場で終わってしまうのはもったいないと思うんですよね。毎年毎年そうなんですけど、みんなの発表すごいいいなと思って、もう帰って、それきりなんです。それは正直、宝をばいってという感じで、もったいないです。これを機に、僕はもう5年生なのであと2か月で卒業してしまうんですけど、これを機に、各校の代表の方分からないですけど、ぜひこの場の外で、別の場所でもっと密接にお互いの意見を交換するような、つながりをつくってほしいなと個人的には思います。

○本塚コーディネーター ありがとうございます。

次、クロ社研さん、どうぞ。

○為乗さん 「創るをシェアする」に関してなんですけど、ほかの方たちは、体を動かしたり、ボードゲームをしたり、クイズをしたり、僕らはアンケートと新聞という、こっちから一方的に発信というわけではないんですけど、新聞という若い人は難しいイメージを持ってしまって、そうするとずっと興味が消えてしまったりするので、新聞とかで楽しく防災を学べるかって言うと、ちょっとそこは難しいんですけども、僕らはこちらの機会を機に楽しさを入れたいなみたいな、上の人に言わないとだめですけど、そう思っているんです。ちょっと楽しさがあると、僕らは防災教育ではあるんですけど、直接的に年配の方や年下の人たちに伝えられているかという、一方的に新聞やSNSで発信するという感じになっちゃっている、そこで今止まっちゃっているんで、でも新聞は消したくはないんです。クロ社研と言えば新聞みたいなところがあるので、ちょっと表現が難しくなってしまうのは新聞の課題であるので、例えばなんですけど、新聞の内容を柔らかくしたり、簡単にしたりとか、写真を取り入れてみたりとかいろいろ工夫して、せっかく皆さんに会えたので、その経験を生かして、もう少し楽しく防災を広げられるようにこれからしていきたいなというふうに思っています。

○本塚コーディネーター ありがとうございます。

最後に、県立大、よろしく願いいたします。

○田中さん 今年の災害メモリアルは、未災者から未災者へつないでいく方法とかを考えていくということで、今年1年つくるという活動を自分ができて思うのは、やっぱり楽しく伝えるというのも大事だし、それと同時に、やっぱり被災者あってのことだと思うので、被災者の声を聞いたり、被災者に寄り添うっていうのもまだまだ必要だと思っていました。自分たちはツアーで花壇とかを見てもらって、住民さんの成果とかを見てもらったんですけど、そこに隠れている裏側というか、時間であったり、思いであったり、エネルギーとかをもっと自分たちも知って、それを伝えていけないんじゃないかなというふうに思いました。

○本塚コーディネーター ありがとうございます。

たっぷり時間をいただいて、ちょうどいいぐらいの時間までさせていただきました。

これで一旦、パネルディスカッションとしては、前の登壇者の話は終わりにして、最後にグラフィックレコードのほうでどのようにおまとめいただいたかを紹介していただいて、パネルディスカッションのまとめとさせていただきますと思います。

グラフィックレコーダーの多田さん、よろしく願いいたします。

○多田さん 皆さん、お疲れさまでした。本当にすばらしい発表をありがとうございました。

毎年言ってますけども、実は私も当初は、この災害メモリアルアクション KOBÉ が始まった1年目にこっち側というか、皆さん側というか、明石高専のOBでして、D-PRO に所属しておりました。ゲームの制作の発表も当時から行っていて、すごい増えて、すごいなというふうに思っているんです。私は特に前半の最終報告会のところを中心に書かせてもらったんですけど、ここに書いている内容は、もっとすばらし



くまとめられた内容が後ろのポスターに書かれてあると思いますので、全体の感想としては、参加校が増えたなっていうのが何よりの感想で、最初の1年目ってこの四角できれいに収まってたけど、どんどんはみ出して行って、すごい観客席も広がって、どんどんでかくなってるというのは非常に思っています。今日の大きなテーマかなと思うんですけど、未災者から未災者へどう伝えていくかというときに、この9チームが発表したけど、みんな全然内容もかぶってないというか、本当にすごい多様な活動をされていて、その中の課題として、未災者から未災者へ伝えるというときに、じゃあどう伝えていったらいいのか、関心がない人は本当に関心がないから分からへんわというところで、私も開発者側やったのでその中の落とし穴やなと思っているのは、自分たちは防災のことを学んで、防災楽しい、防災のことをやっていこうってやる気に満ちてる。だからこそ一般的に関心がない人の気持ちが全然分からへん、何で防災に関心がないのかよく分からへんという状況になってしまうんじゃないかなと思っていて、でもその中で、これだけ9チームが集まっている中で、特に僕がすごいなと思ったのはクローズアップ社会研究会さんで、すごい違う視点、防災専門じゃないけど、そこに政治っていう新しい見方を入れ込んできたというのはすごいなと思っていて、こういう違う視点を入れていくというのがこれから大事なかなと、書いてて思いました。私は以上です。

○山越さん 多田さんにお手伝いいただきながらパネルディスカッションのほうを書かせていただきました。私は逆に今年から初めて災害メモリアルアクションに関らせていただいて、私はどちらかというと、防災についての活動とか知識とかがない立場で書かせていただきました。

その中で、私が皆さんの中でよく聞かれているなと思った声は、自分たちがその取組を楽しんでいるということが何より聞かれたかなと思います。あともう一つ印象に残っているのは、つながるということ、防災の活動を通して活動の輪を広げていくことであったり、世代を超えたつながり、仲間が増えていくということが、両方ですね、そういう楽しみを覚えつつも、そこが広げられないことに対する葛藤なども受け取りました。

今回のテーマとしては、未災者から未災者へということだったんですけど、未災者と被災者に対して、どちらに対して防災のイベントをするほうが好ましいかという、ちょっとぶっちゃんけた意見も聞けて、素直な

感想が聞き出せたというのが、この場にとって意味があったことなんじゃないかなというふうに思います。

何より今回のパネルディスカッションのテーマでもある「創るをシェアすると・・・」ということで、お互いの活動に対する質問であったり、そういうアイデアはどこから来たんですかとか、体を動かすゲームという発想はなかったので取り入れていきたいということであったりだとか、ぜひ完成させてほしいし、体験会に参加したいという声だったり、自分たちとは違う伝え方とか手段を用いているチームへの関心が見られて、その結果、創るをシェアすることによって新しい風が吹いてくるだったりとか、この場を越えて、この場で終わらせるのがもったいないという思いが登壇者から聞こえてきて、もちろんこの場にいらっしゃる方の思いも聞きたかったんですけど。それで思ったんですけど、これはまだ未完成ですけど、付箋のほうを用意してもらっているので、キックオフ会とか中間発表会のときのように、もし思いとかあって、これ未完なので、付箋に皆さんの思いを書き加えてもらって、皆さんの活動報告のグラフィックとして一緒に完成させてもらえたらなと思っております。

以上です。ありがとうございます。







# 閉会のあいさつ



河田恵昭センター長

## ○人と防災未来センター河田センター長

皆さん、ご苦労さまでした。

私、実は第1回の「メモリアルコンファレンス・イン神戸」のときから、今回の28回まで、皆勤なんです。最初、この人と防災未来センターの建物ができたのは2002年ですから、それまではまず会場探しをやらなきゃいけなかったということで、第1回は神戸国際会議場を全館借り切ってやりました。参加者は約1,000人、2日間をかけてやらせていただきました。それを10年やって、その後の10年は目標を変えて「災害メモリアル KOBE」をやりました。そして、2015年からこの「災害メモリアルアクション KOBE」をやっているわけですけど、毎回非常に得るところが多いというのが「災害メモリアルアクション KOBE」の特徴ではないかと思っています。

今日はたくさんのお話を聞かせていただきまして、この「創る」というのは英語でクリエイトって言うんですけど、クリエイトをシェアリングするというのは、実はとても大切なことだと思っています。なぜかといいますと、「メモリアルコンファレンス・イン神戸」の第1回をやったときには、南海トラフ巨大地震というふうなものは具体的には指摘されていませんでした。しかし、この活動をやっている中で、いわゆる国難災害となって、非常に多くの犠牲者が出てくる災害がこれから起こるということで、今日も一番ベースには、これからの南海トラフ巨大地震をどう受けるかということが非常に大きな問題になっているということですね。

私ども研究の第一線で頑張っている人間にとっては、被害を少なくするというだけではなくて、ご承知のようにマグニチュード9の地震が起こりますと、被災地に住んでいる人、現在6,100万人なんですね。6,100万人ということは、誰でも被災者を身近に持っているという社会になるんですね。そうすると、日本全体が物理的な被害だけじゃなくて、精神的に参ってしまう、不幸が襲ってくるという社会が確実に来るわけで、太平洋戦争に負けて何もなくなってしまった我が国が七十数年かかってここまでたどり着いたわけですけども、今度南海トラフが起こったらそんな力がないんじゃないのかと。ご承知のようにどんどん高齢者が増えています。高齢者というのは、経験はあるんですけども、馬力がない、力がない、何か新しいことをする力がない。そうすると、大きな不幸が起こると、それでだめになってしまう。国全体が潰れてしまうんじゃないかという心配をしています。ですから、物理的な被害がどれだけ大きいということだけが問題じゃなくて、国民一人一人が元気がなくなるっていう社会が下手すると確実にやってくるという、そういうことをとても心配しています。

そういう中で、今日パネルディスカッションに加わっていただいた方たち、大変幸せそうでした。そうなんです、私たちは何かに幸せを感じずような社会にしなければいけないということなんですね。最近いろいろ知識を蓄えているんですけども、例えば皆さん食事するときに、味わいながら食事をするとう幸福感がとても高くなるということが学術的に明らかになっているんです。すなわち、インスタントラーメンを食べるよりも食事をきちっと味わいながら食べると、私たちの幸福感は高くなるということが証明されました。でも、皆さんおもしろいんですけども、そうすると幸福感が高くなると知った途端に、実はおいしくなくなるということなんですね。つまり、プロにならなきゃいけないということなんです。

ですから、今日ここに参加していただいている方たち、こういう活動をやっていただくことをとても心弾ませてやっていただいていると思うんですけども、これを続けていただきたい。続けていただくということは、アマチュアからプロになるんです。それがとても大事です。相手が小学生とか高齢者でいろいろうまくいかないことがあります。ですけども、ご自分は非常に豊かな人間になるという、そういう大きなプラスが出てくることは間違いないということも分かっています。

私、実は防災研究をやって今年で47年ですが、何でこんなに長いことやっているかという、研究することが楽しいんです、幸せなんです。ですから、私は明日も神戸に出てまいります。今月は土日ありません。大変忙しいんです。でも、それは大変体も疲れるんですけども、私にとってはとても幸福なんです。だから続けられるんです。いずれ必ず南海トラフ巨大地震が起こったときに、皆さん一人一人が災害に負けない、そういう人たちになってほしいと思うんです。

今日のクリエイトすることをシェアリングするというのは、一人一人が横につながって、それぞれが幸福感を持って生活するというふうな社会にしないと、災害に負けるということなんです。直接犠牲になるとか、家が潰れるとかそういう被害じゃなくて、心が傷つくというのが一番困るんですね。それに備えなければいけない。それを知らずに被災しますと、その後の人生、真っ黒けになってしまうわけです。今後の国難災害というのは、非常に大きな被害をもたらします。国民一人一人が幸せというところから遠ざかるような社会になってしまうと、日本は潰れてしまうと思っています。私ども研究をやりながら、政府に対しても日本国憲法を改正して、緊急事態条項を入れてくれて言っています。まさに元気のない国になるというのが一番困るんです。そういう意味で、今日、創るということをシェアリングするということは、一人一人が横につながっていただきたい、そしてそれぞれの価値観で災害に負けない強い人になっていただきたいと思っています。

「メモリアルコンファレンス・イン神戸」が28年前にスタートしたときには、そういうようなことは一切考えていませんでした。ですけども、これだけ長くやってまいりますと、毎年のように気づくことがたくさんあります。今年は私、一番前で偉そうにじっと聞いていましたけれども、やってくる国難災害にどう対処するか、被害を少なくするだけじゃなくて、一人一人がそれにめげないような、そういう生き方をさせていただかなきゃ困るわけで、そういうことにささやかなパネルディスカッション、あるいは皆さんの発表がつながるといことであれば、本当に幸せなことだと思っています。今日はどうもありがとうございました。

# 災害メモリアルアクション KOBÉ2023 のことば



災害メモリアルアクションKOBÉ

## ACTION 2023 のことば

(大穂町 岩間敬子さんは、)『自分の命は自分でしか守れない』と何度も訴えかけるように話されました。「一住民であっても、**自分の考えに蓋をするのではなく、勇気を出して自分の意見を伝えることが大切だ**」と伝えられました。

僕の小学生の時は(防災授業が)あったんですが、(中略)  
**僕は当時から防災に興味はあったんですが、その防災授業自体は正直つまらんなと思ってました。**  
怖いビデオ見て、先生の話聞く、一連の流れがパターン化されているし。聞かんでもわかるわって思ってたんですよ。で、自分が今、防災授業を作っていく立場になって**一番気をつけているのは、生徒が受け身にならない授業をつくること**だと思っています。

私たちは同世代の高校生に向けて主に伝えるっていうスクールメディアとしての役割があるので、**私たちが知りたいなということ**を届けていけるように、**私たちの目線で書いて、まず自分たちのしたいことをきちんとブラッシュアップして、ちゃんと自分たちで取り組む**っていうことをやっています。

Q. 人と関わって、考えて、伝えていくということは、  
どうすることが大事だと思いますか？

人とつながる上で**一番大事なのは「楽しい」ということ**だと思います。

**自分たちが当たり前だと思わないこと、**  
自分たちの常識が通用しないことがあるということを前提にして、色々話したり接していかないといけないと思います。

**信頼関係。**被災者の方に色々聞いていく中で、**つらいことや大変だったことを聞き出すのは難しい。**

防災に関する伝えたい知識を織り交ぜながらも、**楽しい記憶にすることがすごい大事**だと思います。  
楽しかった記憶は、あとで母さんに話し、友達にも話し、その後の記憶にもずーっと残るので。

Q. 「創る」をシェアすると・・・？

めっちゃ楽しかった！今まであんまりなかった**防災チーム同士での横の繋がりが**  
**ちょっとずつ芽生えたんじゃないかな。**

自分たちが欲しい課題とか改善点がこの場で交流して得られたのは非常に大きい。  
やはり明石高専の中だけで話し合いをしてゲームを作ると、やっぱ変なゲームになっちゃうんです。こうやって交流することで、自分たちではなかなか思いつかない意見が新しい風みたいな感じでよかったと思うので、創るをシェアすると・・・  
**「新しい風が吹いてきた」、です！**

僕らの活動にも**楽しさを入れたいな**と思った。

お互い交流することで自分たちが見つけられなかった視点、予想外を取り入れることができてる。言わば10年分の僕たちの活動期間が短縮されたとも考えられるわけです。それを考えると、シェアする場だけにするのはもったいない。**これを機にぜひ、この場の外で、もっと密接に**  
**お互いの意見を交換するような、つながりをつくって欲しいな!**と思います。

# プログラム

伝える大震災、つながる防災

災害メモリアルアクションKOBЕ

# ACTION 2023

## KOBЕのことば

**参加無料**

※新型コロナウイルス感染防止のため、会場が満席となった場合は、入場をお断りいたします。  
※会場にお越しになる場合は、マスク着用をお願いします。  
※感染拡大の状況により会場での開催を中止とさせていただく可能性がございます。

### 活動報告会

日時

**2023.1.7 [SAT]**  
**10:00 → 13:30**

会場

阪神・淡路大震災記念  
**人と防災未来センター**

これまで「阪神・淡路大震災」を経験した世代が教訓と提言をまとめた「メモリアルコンファレンス・イン神戸(1996～2005)」,そして、その教訓を次世代に伝えるために「災害メモリアル KOBЕ(2006～2015)」を実践してきました。

2016年からこの先の10年を見据え「KOBЕのことば」をキーワードに「災害メモリアルアクション KOBЕ」という取り組みを開始しました。阪神・淡路大震災のつらい経験を二度と繰り返したくないという強い思いから、学んだことを次に活かすことができる形をつないでいこうという取り組みです。大震災から20年以上経った今だからこそ聞けることば、今しか聞けないことば。その個々の経験を未来へどう活かせるか。世代を超えて、共有し、話し合い、未来へつないでいく。今の KOBЕ だからこそできるアクションです。

近い将来起こりうる南海トラフ巨大地震を見据えて、これから大震災を経験するかもしれないすべての人ひとへ、防災の意識を継続させ、少しでも被害を小さくするために、「未災者」が大震災を知り、さらに「未災者」に伝え、つないでいく、新しいチャレンジです。

私たちはこれまでにないアクションにより、継続的な取り組みの検証と検討の場を通して、将来の被災者を減らします。

主催：人と防災未来センター、京都大学防災研究所 都市防災計画分野

共催：京都大学防災研究所 自然災害研究協議会近畿地区部会

企画：災害メモリアルアクションKOBЕ企画委員会

後援：兵庫県教育委員会/神戸市/神戸市教育委員会/朝日新聞神戸総局/読売新聞神戸総局/毎日新聞神戸支局/産経新聞神戸総局/神戸新聞社/NHK神戸放送局/ラジオ関西/神戸学院大学/明石工業高等専門学校/関西大学社会安全学部/兵庫県立舞子高等学校/兵庫県立大学

### プログラム

※敬称略

#### 10:00 開会挨拶

災害メモリアルアクションKOBЕ 企画委員会委員長  
人と防災未来センター 上級研究員  
京都大学防災研究所 教授 牧 紀男

#### 10:05 活動発表

発表：①兵庫県立舞子高等学校  
②滋賀県立彦根東高等学校  
③TEAM-3A  
④国立明石工業高等専門学校 D-PRO135°  
(明石高専防災団) 開発チーム  
⑤国立明石工業高等専門学校 D-PRO135°  
(明石高専防災団) 地域連携チーム  
⑥神戸学院大学 現代社会学部 社会防災学科 安富ゼミ  
⑦神戸学院大学 クローズアップ社会研究会  
⑧関西大学 社会安全学部 奥村研究室  
⑨兵庫県立大学防災リーダー教育プログラムチーム

#### 12:30 パネルディスカッション 「『創る』をシェアすると・・・」

コーディネーター：国立明石工業高等専門学校 講師 本塚 智貴  
人と防災未来センター 研究部 主任研究員 林田 怜菜  
グラフィックファシリテーション：大阪防災プロジェクト共同代表 多田 裕亮  
山越 香恋  
パネリスト：TEAM-3A  
国立明石工業高等専門学校D-PRO135°  
(明石高専防災団) 開発チーム  
国立明石工業高等専門学校D-PRO135°  
(明石高専防災団) 地域連携チーム  
神戸学院大学 クローズアップ社会研究会  
兵庫県立大学 防災リーダー教育プログラムチーム  
以上5団体代表

#### 13:25 講評・閉会挨拶

災害メモリアルアクションKOBЕ 企画委員会顧問  
人と防災未来センター長 河田 恵昭



災害メモリアルアクションKOBÉ

# ACTION 2023

全体テーマ:

## KOBÉのこぼ

「KOBÉ」とは、阪神・淡路大震災の被災地域全体と、災害の影響を受けたひと、そして災害後まちのために活動したひと、すべてを表現しています。

阪神・淡路大震災から28年、大震災を直接経験していない若い世代の人たちが、災害を経験した人々へのインタビュー、アンケート、交流事業などの活動を通じて、次世代に伝えるべき「KOBÉのこぼ」を紡ぎ、活かし、広げます。「過去・いま・未来」を見据え、世代を超えて活動する、最先端のアクションです。

### 兵庫県立舞子高等学校



阪神・淡路大震災を経験した学校の先生方から震災当時のまちの様子やその時感じたことを聞き、私たちの言葉で同級生に発信しています。被災者の生の声を未災者が聴く機会を私たちが作り、被災者と未災者をつなぐ架け橋になりたいです。

### 滋賀県立彦根東高等学校 新聞部



東日本大震災復興支援特集「福島をつなぐ」の連載を始めて11年が経ちました。部員も読者も被災を経験していない者が多い今だからその災害との向き合い方を考えています。今年は水と食の安全を守りながら復興に向かう福島姿から、湖国・滋賀に住む我々が守るべきものは何か考えました。

### チーム トリアルエース TEAM-3A



TEAM-3Aは昨年度まで明石南高校で自主的に地域防災に取り組んでいた生徒が、活動範囲を広げるためにNPO法人「TEAM・あげあげ」のサポートにより今年度設立された学生による自主防災チームです。テーマはこれまでと同じ「いつでも・どこでも・だれでも楽しく「ぼうさい」」

### 兵庫県立大学防災リーダー教育プログラムチーム



兵庫県立大学防災リーダー教育プログラムでは、ぼうさいこくたい2022にあわせて、阪神・淡路大震災を経験した地域住民の方々に協力して頂き、HAT地区の街歩きを実施しました。また、12月には小学校6年生を対象とした防災授業を行いました。これらの活動について報告いたします。

### 国立明石工業高等専門学校 D-PRO135° (明石高専防災団)



#### 地域連携チーム

学校、児童館での防災授業や各種防災イベントへの参加、防災DXシステムの開発などの活動をしています。避難所運営ゲーム「チャレンジ」や防災ボードゲーム「RESQ」の体験、クイズを交えた講義などを通して、防災を楽しく学んでもらうことをコンセプトに活動しています。



#### 開発チーム

防災ゲームの開発や改良、防災クイズの製作を行っています。今年度は、開発を進めていた防災カードゲーム「TRY!」を小学生向けの防災イベントにて初めて実用化しました。高専生ならではのアイデアが詰まった、遊んで学べる防災ゲーム作りを続けています。

### 神戸学院大学 現代社会学部 社会防災学科



#### 安富ゼミ

安富ゼミでは2020年度から各地の避難の実態について調査してきました。今年8月には東日本大震災から11年が経過した岩手県大槌町や、2016年8月の台風10号の被災地・同県岩泉町を訪れ、調査しました。町役場職員や語り部の方々からインタビューを行い、災害情報の重要性について学びました。



#### クローズアップ社会研究会

私たちは、現代社会学部の学生を中心に、身の回りで行っている社会問題・時事問題について研究をしています。現在は選挙と防災の関係性について、候補者視点・投票者視点の2つから研究しています!! 研究したことは、自分たちで新聞という形でまとめ、発行しています!!

### 関西大学 社会安全学部 奥村研究室



阪神・淡路大震災で、大きな精神的ストレスと劣悪な生活環境によって失われる命があるということが初めて広く社会に認知されました。「災害関連死」です。私たちは、その後も繰り返される関連死の発生状況を分析するとともに、当時の教訓は生かされているのかを検証しています。

パネルディスカッションテーマ:

## 「『創る』をシェアすると・・・」

未災者から未災者へと語り継ぐことを目指す学生たちの活動は「聴く」ことから始まり、新聞、ゲーム、ヒアリングシートなど、様々なカタチの「創る」で表現されている。学びがあるからこそ「創る」ことができる。その「創る」をシェアすることで活動に新たな化学反応が生まれ、拡がりをより勢いづけるのではないだろうか。未災者の「創る」に込められた思いをシェアしよう。

お問い合わせ: 阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター事業部普及課 Tel: 078-262-5066 Fax: 078-262-5082

# 災害メモリアルアクション KOBE 企画委員会名簿

※2022年7月1日現在

役 職	氏 名	所 属
委 員 長	牧 紀男	京都大学 防災研究所 社会防災研究部門
委 員	伊藤亜都子	神戸学院大学 現代社会学部 社会防災学科
	浦川 豪	兵庫県立大学大学院 減災復興政策研究科
	卜部 兼慎	NPO法人防災デザイン研究会 株式会社GK京都 第1デザイン部
	太田 敏一	防災リテラシー研究所
	大塚 毅彦	国立明石工業高等専門学校
	大山 武人	NHK大阪放送局
	奥村与志弘	関西大学 社会安全学部
	小淵 文恵	滋賀県立彦根東高等学校
	鈴木あかね	兵庫県立舞子高等学校
	高橋 徹	NPO法人 TEAM・あげあげ
	中野 元太	京都大学 防災研究所
	西口 正史	ラジオ関西 編成営業局
	福岡 龍史	株式会社 エフエム・プランニング
	本塚 智貴	国立明石工業高等専門学校
	安富 信	神戸学院大学 現代社会学部 社会防災学科
横山 愛子	株式会社GK京都 第1デザイン部	

サポーター	甲斐聡一郎	兵庫県災害医療センター
	越山 健治	関西大学 社会安全学部、人と防災未来センター上級研究員
	近藤 誠司	関西大学 社会安全学部
	諏訪 清二	防災学習アドバイザー・コラボレーター
	松元 正博	NPO法人 人・家・街安全支援機構
	宮本 匠	大阪大学大学院 人間科学研究科
	矢守 克也	京都大学 防災研究所
	高森 順子	愛知淑徳大学・阪神大震災を記録しつづける会

顧 問	河田 恵昭	人と防災未来センター・関西大学
	土岐 憲三	立命館大学衣笠総合研究機構 歴史都市防災研究所（特別研究フェロー）
	林 春男	防災科学技術研究所
事 務 局	後藤 隆昭	人と防災未来センター 副センター長
	筆保 慶一	事業部長
	行司 高博	研究部長
	波々伯部仁	普及課長
	足立 耕三	普及課課長補佐（事務主担当）
	林田 怜菜	主任研究員（研究部主担当）

# 災害メモリアルアクション KOBÉ2023 参加学生名簿

※順不同

グループ名	氏名	所属	学年	
兵庫県立舞子高等学校	白谷 奈緒	兵庫県立舞子高等学校 環境防災科	2	
	義村理央菜	兵庫県立舞子高等学校 環境防災科	2	
	長峰 陽斗	兵庫県立舞子高等学校 環境防災科	1	
	細谷 悠彬	兵庫県立舞子高等学校 環境防災科	1	
	大崎きらり	兵庫県立舞子高等学校 環境防災科	3	
	高橋 茉那	兵庫県立舞子高等学校 環境防災科	3	
	柳田 愛実	兵庫県立舞子高等学校 環境防災科	3	
滋賀県立彦根東高等学校	橋本 萌	滋賀県立彦根東高等学校 新聞部	2	
	宇田 優奈	滋賀県立彦根東高等学校 新聞部	2	
	西村 果純	滋賀県立彦根東高等学校 新聞部	2	
	伊東 大舞	滋賀県立彦根東高等学校 新聞部	1	
	森岡颯太郎	滋賀県立彦根東高等学校 新聞部	1	
TEAM-3A	浜田 寿来	TEAM-3A	高2	
	和田 愛子	TEAM-3A	高2	
	堀 一葉	TEAM-3A	高3	
国立明石工業高等専門学校 D-PRO135°(明石高専防災団) 開発チーム	大坪 七海	国立明石工業高等専門学校	3	
	中島 彩希	国立明石工業高等専門学校	3	
	奥田 耕大	国立明石工業高等専門学校	5	
	西田美野里	国立明石工業高等専門学校	1	
国立明石工業高等専門学校 D-PRO135°(明石高専防災団) 地域連携チーム	長手 美濤	国立明石工業高等専門学校	3	
	山森 陽太	国立明石工業高等専門学校	5	
	斉藤 美音	国立明石工業高等専門学校	1	
神戸学院大学 現代社会学部 社会防災学科 安富ゼミ	藤崎 隆太	神戸学院大学 現代社会学部 社会防災学科 安富ゼミ	3	
	八木 颯太	神戸学院大学 現代社会学部 社会防災学科 安富ゼミ	3	
	木川 綾介	神戸学院大学 現代社会学部 社会防災学科 安富ゼミ	3	
	光瀬 晴夏	神戸学院大学 現代社会学部 社会防災学科 安富ゼミ	3	
	関 航	神戸学院大学 現代社会学部 社会防災学科 安富ゼミ	3	
	佐桑 健介	神戸学院大学 現代社会学部 社会防災学科 安富ゼミ	3	
	東 汰一	神戸学院大学 現代社会学部 社会防災学科 安富ゼミ	3	
	二星 雄大	神戸学院大学 現代社会学部 社会防災学科 安富ゼミ	3	
	兵山 穂香	神戸学院大学 現代社会学部 社会防災学科 安富ゼミ	3	
	角矢 久龍	神戸学院大学 現代社会学部 社会防災学科 安富ゼミ	3	
	岩下 漣	神戸学院大学 現代社会学部 社会防災学科 安富ゼミ	2	
	萩野曹太郎	神戸学院大学 現代社会学部 社会防災学科 安富ゼミ	2	
	堀川 智哉	神戸学院大学 現代社会学部 社会防災学科 安富ゼミ	2	
	河木 剛	神戸学院大学 現代社会学部 社会防災学科 安富ゼミ	2	
	在里 駿佑	神戸学院大学 現代社会学部 社会防災学科 安富ゼミ	2	
	神戸学院大学 クローズアップ社会研究会	北村 昌卓	神戸学院大学 クローズアップ社会研究会	4
		國松 万熙	神戸学院大学 クローズアップ社会研究会	3
		稲澤 遥樹	神戸学院大学 クローズアップ社会研究会	3
服部 仁美		神戸学院大学 クローズアップ社会研究会	2	
為乗 湧司		神戸学院大学 クローズアップ社会研究会	2	
名越健一郎		神戸学院大学 クローズアップ社会研究会	1	
関西大学 社会安全学部 奥村研究室		山崎 健司	関西大学大学院 社会安全研究科 博士前期課程	1
	栗田 直樹	関西大学 社会安全学部 奥村研究室	4	
	菅野 圭汰	関西大学 社会安全学部 奥村研究室	3	
兵庫県立大学 防災リーダー教育プログラムチーム	西尾 美羽	兵庫県立大学 防災リーダー教育プログラム	2	
	四方 喜成	兵庫県立大学 防災リーダー教育プログラム	2	
	松本野々花	兵庫県立大学 防災リーダー教育プログラム	2	
	桂 光輝	兵庫県立大学 防災リーダー教育プログラム	2	
	田中 修弥	兵庫県立大学 防災リーダー教育プログラム	3	
	高橋 真里	兵庫県立大学 防災リーダー教育プログラム	2	
	藤井真梨乃	兵庫県立大学 防災リーダー教育プログラム	3	
	菅 遥輝	兵庫県立大学 防災リーダー教育プログラム	2	
	小西竜太郎	兵庫県立大学 防災リーダー教育プログラム	2	
	田尻 翔吾	兵庫県立大学 防災リーダー教育プログラム	2	
	木村 百花	兵庫県立大学 防災リーダー教育プログラム	2	
	増田 誠也	兵庫県立大学 防災リーダー教育プログラム	2	
	清水 結凜	兵庫県立大学 防災リーダー教育プログラム	2	
	三木 玲苑	兵庫県立大学 防災リーダー教育プログラム	3	
	坂本 賢哉	兵庫県立大学 防災リーダー教育プログラム	2	

# 発表風景等

## キックオフ会 (ワークショップ)

2022年8月3日



## 中間発表会 (ワークショップ)

2022年11月19日





災害メモリアルアクションKOB

**ACTION**

**令和4年度 災害メモリアルアクションKOB 報告書**

主 催：阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター  
京都大学防災研究所 都市防災計画分野

企 画：災害メモリアルアクションKOB企画委員会

人と防災未来センター 事業部普及課内

災害メモリアルアクションKOB企画委員会

〒651-0073 神戸市中央区脇浜海岸通1丁目5-2 西館6階

Tel : 078-262-5066 Fax : 078-262-5082

[http://www.dri.ne.jp/memorial\\_action\\_kobe](http://www.dri.ne.jp/memorial_action_kobe)